モントリオールへの道

9月7日東京体育館で開かれたプレオリンピック代表壮行試合は、近来にない賑やかな催しだった。

それと云うのも、男女ナショナルチーム全員が史上初めて勢揃いしたほか、ミュンヘンオリンピック代表まで呼び寄せるという、かってない企画にあった。

さて、この催しを見ながら、日本のトップ層も、ずい分厚味を増し、いわゆる新旧交代もなかなかスムーズに行われているという印象をうけた。

こうした芽は、一朝一夕にはふかぬものだし、それだけに近年の強化スタッフの努力を買うところだが、まだまだ課題が山積しているのも事実である。

特に、全国二千余チームの現場指導者の意欲をかり立てるためにも、いかに、人材を掘り出すシステムを確立するかは、大きなテーマであろう。

現在のナショナルチームはたしかに支持を受けているが、後続選手については、言葉を悪くすれば「無策」である。

これは、現在に限らずいつもつきまとっていた問題で、中央集権的な選こう姿勢が批判されたこともあった。

昨年、ナショナルチームの運行を、技術部に包含したのは、そうした意味で注目されたが、やはりどうしても目先の強化が第一となり、技術部をあげて、ナショナルチームを盛り立てるムードには至っていない。

そこで、その最初のステップとして、技術部による「スカウト網」の建設を提案したい。

技術委員は、中央、地方を問わず、ナショナルチームへ送りこめるような有望選手を見つけ出し、推ぜんするのを仕事の一つとするのである。

もちろん、ナショナルチームのコーチングスタッフも、これまで通り、多くの大会を見て、選手を探す努力は続けなければいけないが、その行動範囲はおのずと決まってしまう。

例えば、インターハイより、その一つ前、ブロック高校選手権に目を見はらす必要があるのだ。

外国チームが国際試合に臨むエントリー14～16人のうち、不動のメンバーは10人程度、残り4～6人は全国から推されたリストのなかから、テストのつもりで連れてくる若手か新人である。

日本の強化体制が〝挙国的〟になってこそ、世界への道も始めて開けるのではあるまいか。（Z）

市民ハンドボールの芽

日本協会普及指導部の手がけている「ミニ・ハンドボール構想」が、もう一つ、まとまらないうちに、各地の年少者に対するハンドボール普及は地味ながらも、着実な足どりを示しているようだ。

毎度のことながら、初心層、一般層に対する施策は、日本協会より、地方組織のほうが、〝現場〟に近いせいもあって、はるかに積極的だし、巧い。

しかし、こと年少層へのハンドボールについては、本誌前々号で、愛知の西川勤也氏が投稿されているように、日本協会がなんらかの姿勢を示し、音頭とりをしなければならぬ時期にきているのではないだろうか。

日本協会が乗り出すとかえってコトを大きくしてしまい、未成熟なままで、半端に育ててしまう、とする首脳陣の見解も判らぬではないが、年少ハンドボール育成にたずさわっている人たちも、そろそろ、いろいろな壁に突き当りはじめており、いっそうの前進を企るために、全国的な集約を試みるのも間違ってはいまい。

さしあたって考えられるのは学童ハンドボール、ハンドボールスクール、年少者教室などの関係者を一堂に集めて、現状を披露しあうことだ。

市民ハンドボールの種まきはどのようなケースでも、情熱に満ち々々て、熱っぽくスタートする。

それだけに、軌道へ乗り切ると案外、惰性に流れてしまいマンネリズムに落ちこむおとし穴がある。

かって本誌でも紹介された兵庫・三田市の少年ハンドボールスクールの関係者からも、ここへ来て問題がのぞきはじめたという便りが寄せられてきている。

歯切れのよいリズムを奏でているこのあとに聞こえるであろう不協和音。

いわゆるクラブの育成についても、地方ごとに事情が異なり、一つの線を引きにくいが、関係者の抱いている問題点は、そう幾通りに岐れるものではなさそうだ。

○○連盟だとか△△協会だとか全国組織らしい看板をかかげないと、こうした問題を話し合う機会を持てないような印象もあるがそのような必要はさらさらない。

新しい形の〝全国会議〟として、上部機関なり、日本協会なりに、一つ骨を折って欲しい。

そこに集った人たちの発言、意見は、きっとすばらしい光りを放つにちがいない。（杉山）

「ハンドボール」
50年10月号（第135号）目次

【表紙写真】新旧ナショナルプレイヤーの激突にわいたプレオリンピック壮行試合・代表チーム、柳川の果敢な攻撃
（9月7日・東京体育館）
撮影・山田 真市

オリンピック・アジア予選（男子）問題

日本協会〝解決〟へ積極姿勢示す

日本協会は9月7日東京体育館で開いた緊急常務理事会で、いっこうに進展をみせないモントリオールオリンピック男子アジア予選の解決へ、積極的に乗り出すことを決めプレオリンピック団長として派遣する荒川清美理事長に、モントリオール市で、IHF（国際ハンドボール連盟）首脳と、なんらかの決定をみるような話し合いを要望した。

具体的な進展示さず

日本、韓国、イスラエル、クウェート、台湾の5ケ国がエントリーしたオリンピックアジア予選は今春4月のIHF理事会で「5ケ国2回総当りを決めた」（渡辺和美アジア選出IHF理事）あと、開催地については、一堂集結を第一条件に、各国へその意思を打診する策がとられた。

6月30日〆切りのこのリクエストに対し、開催を名乗り出たのはイスラエルだけ（本誌前号既報）。

本来ならこれで、組み合せ決定へ進むわけだが、IHFはイスラエル―日本、イスラエル―クウェートの〝関係〟を思んばかってかそうした作業へ手をつけず、再び各国に対し意見を求めたほか、特に日本協会には「台湾、イスラエル、韓国、クウェートと試合することに同意されたい」という8月18日付の国際電報が寄せられ、さらに8月22日付で「日本は台湾、イスラエル及びクウェートで試合するか確認されたい」という連絡を打電してきた。

日本、「イスラエル開催」に同意

日本協会は、さきに5ケ国集結の予選開催は、アジア政情から難しいとみて、3案からなるトーナメント法式を提案（＝本誌132号参照）しており、18日付電報は「トーナメントの提案を取り下げ、原案どおり、総当りを了解して欲しい」とのIHF側のこん請と解釈、荒川理事長ら首脳陣も「異議なし」の態度を明きらかにしたのだが、追いかけるように舞いこんだ22日付電報は理解が難しく、同電に「韓国」の名が脱けていたことも、いっそう混乱を招いている。（編集委注・この点の真相はいまだに不明）

このあと、IHFからは、いっさいの連絡がなく、渡辺IHF理事も「プレオリンピックの時に、IHF首脳と話しあい、ここで一切が決まるだろう」というだけでラチがあかない。

このため、日本協会では8月23日の月例常務理事会で、プレオリンピックの全日本選手団々長として荒川理事長を乗りこませ、アジア予選に関するIHF側の意向を確認するとともに、「日本で予選会を開催する意思はないが会場がどこになっても選手団を参加させる」と、イスラエル開催同意を含んだ日本の態度を改めて通達することに決めた。

「トーナメント」を再主張か

9月7日の緊急常務理事会の要望はこうした一連の動きをさらに強めるものとして、荒川理事長（団長）の乗り出しによって、IHF首脳とともに、アジア予選解決の糸口を見出そうとするもので、

①、IHFがイスラエルでの5ケ国集結予選に不安を抱くようなら早々に、トーナメント法式に切り替える。

②、その場合、日本は、「極東」「近東」二分案を採り、両勝者による代表決定戦を提案する。

③、②の場合、すべての経費は参加（関係）国の均等分担とする。

という3点を強調することを申しあわせた。

日本協会が、5月ごろの「今回はあくまで静観、なりゆきに委せて、何処へでも遠征する」としていた態度から、一転、積極策に転じたのは、すでにヨーロッパ、アフリカ大陸などが、予選の準備を進め、早いところでは11月3日開始というカードもあり、アジアだけが立ち遅れている現実と、全日本チームも照準が定まらず士気に影響を及ぼし、強化焦点ぼけと云ったマイナスが生じはじめることなどが要因になっている。

なお、トーナメント法式になった場合でも、イスラエルがらみ、台湾がらみのカードの日本開催はあくまで5月17日の全国理事会決議（＝本誌131号参照）を尊重、誘致の意思を示さないことには変りない。

IHF 政治的解決には難色

解説

荒川理事長(団長)の帰国は10月5日と予定され本誌が読者の手元に届くころは、具体的な実りがすでに明きらかとなっているかもしれないがともかく静観をつづけていた日本協会が、IHFにアジア球界の実情を直接説明する機会を設け、問題解決へ乗り出そうとしていることは評価されてよいだろう。

荒川理事長は「すべてIHFまかせというのでは、アジア地域全体がだらしなくみられる」と、積極姿勢へ〝転換〟した内因を説明しているが、そうかといって、ミュンヘン予選の時のように「日本開催」の声を張りあげられぬだけに、復雑な表情があるのも否めない。

消息筋は、IHFは結局、イスラエル開催に踏み切り、来ない国は棄権扱いにするのではないか、と云う。そうなればコトはいちばん簡単だが、あえて後味の悪さの残る方法を、IHFが強行するかどうか。

一方、日本協会の主張するトーナメント式も、たしかに、この場に於いては総当りよりは現実的だが、その組み合せはたぶんに〝政治的配慮〟が必要である。これはIHFのもっとも毛嫌いする点で簡単にコトは運ぶまい。荒川氏の動きが一つのカギになってくる。

なお、日本協会は9月7日の会議で、今春の世界女子選手権アジア予選のように、「極東」は日、韓台、「近東」はイスラエル、クウェートとしているが、これは1月25日クウェートで開かれたIHF首脳会議（＝本誌128号参照）の申し合せと異るため、受け入れられまい。同会議は「当分の間、イスラエルは極東所属」としているし国際情勢からも無理だ。

全日本男子「プレ」へ出発 団長に荒川氏

日本協会は8月23日の月例常務理事会(東京)でプレオリンピック(カナダカップトーナメント、9月26日～10月2日・モントリオール市ほか。日本男子など6カ国参加)代表団の団長として日本協会理事長・荒川清美氏(53才、日体大教授)を決めた。

代表チームは、大会前カナダ西部を転戦地元チームと親善試合(3戦)を行う予定だったが、相手側の事情でアルベルタでの2試合が中止となった。このため当初の予定を変更して9月22日午後6時30分羽田空港発の日航機で出発した。

23日(現地時間)にブリティッシュコロンビア選抜と1試合をまじえたあと、モントリオール入りする。

帰国は10月5日午後6時45分羽田空港着の日航機(011便)の予定。

プレオリンピック日程(日本関係分)

▽9月26日、対ソ連(ケベック)、▽27日 休み、▽28日対ポーランド(モントリオール)、▽29日対デンマーク(ケベック)、▽30日、対カナダ(シャーブルック)、▽10月1日 対アメリカ(モントリオール)

世界女子代表、10月中旬発表へ

日本協会は、9月7日の月例常務理事会(東京)で、今冬12月ソ連のキエフ市で開かれる第6回世界女子選手権に出場する全日本代表チームの選こうについて話し合い、ナショナルチームコーチングスタッフから技術部へ要望されている「10月中旬発表」の線を承認した。

代表チームは役員3(団長を含む)、選手14名の予定である。

なお、この大会の前に、第2回東ドイツ交流として、代表チームを東ドイツへ立ち寄らせる計画が進んでおり、日本体協を通じての折しょうも、詰めの段階に入っていることが、明きらかとされている。

男女とも試合は一日おき

モントリオール五輪

モントリオール・オリンピック組織委員会は、このほど来年の第21回オリンピック競技大会の正式スケジュールを正式発表した。

それによると、同大会は7月17日開会式、8月1日閉会式の日程で、ハンドボールなど21競技196種目にわたって行われる。

ハンドボール(男・女)の日程は次のとおり(現地時間)

▽男子 7月18日19時～22時、予選リーグ6試合(クロードロビヤールセンター、ケベックラバル大学、シャーブルックパレデスポール)、20日17時30分～22時、予選リーグ6試合(会場は18日に同じ)22日17時30分～22時、予選リーグ6試合(会場は18日に同じ)、24日17時30分～22時、予選リーグ6試合(会場は18日に同じ)26日17時30分～22時、予選リーグ6試合(会場は18日に同じ)、27日14時～17時、7位及び9位決定戦(クロードロビヤールセンター)同19時～22時 5位及び11位決定戦(クロードロビヤールセンター)28日17時～20時15分 3位及び決勝(モントリオールフォーラム)

▽女子 20日17時30分～19時 リーグ3試合(ケベックラバル大学、シャーブルックパレデスポール、クロードロビヤールセンター)、22日17時30分～19時 リーグ3試合(会場は20日に同じ)、24日17時30分～19時、リーグ3試合(会場は20日に同じ)、26日17時30分～19時リーグ3試合(会場は10日に同じ)、28日正午～16時15分リーグ3試合(クロードロビヤールセンター)

〈注〉競技法式は、男子が参加12ケ国を6ケ国づつ2組に分け予選リーグ、各組同位者で順位決定戦。女子は参加6カ国の総当り戦。

全日本男女の強化合宿 日本協会技術部とナショナルチームは、今年度の強化合宿日程の当初計画(=本誌131号既報)を手なおし、次のように決めた。

男子は、オリンピックアジア予選の期日が決まれば、再変更が行われることになる。女子の第5次はオリンピックに備えてのもの。

▽男子・第5次12月16～21日(東京の予定)、第6次51年1月15～25日(場所未定)

▽女子・第3次11月1～10日(四日市市)、第4次11月20～15日(東京の予定)、第5次51年1月20～30日(熊本市の予定)

菊池選手 所属変更 日本協会は全日本・菊池悟選手の所属を9月1日付で稲門ク(東京)から、東京12チャンネル(東京)に変えた。

菊池選手の勤務する同社にチームができ、正規の登録手続きを終えたため。

全日本主務に 東、坂理両氏 日本協会はかねてから、男女ナショナルチームの事務担当者(主務)の専任を心がけていたが、このほど在京候補者のなかから、男子・東一敏(大崎電気)、女子・坂理泰幸(都立西高教諭)の両氏を決め、9月の月例常務理事会で承認した。

両氏は、マネージメントのほか日本協会総務、企画両部とタイアップして、ナショナルチームの国内活動(事業)についてのプランニングも行う。

5年ぶりに総務委 日本協会は9月6日東京で、事務局系理事、委員のこん談会を開き、今後の協会運営について話し合い、オリンピック予選、国際大会などの大きな事業は、総務、企画の柵をはずして、その都度、運営委員会を特別編成することになった。

総務部、企画部の統合については、話題になった程度、これまでどおりで進む。

事務局系担当者の会合は、45年10月以来5年ぶりのことである。

本会人事 本会職員(事務局員)・森岡美子さんは、このほど健康上の理由で退任された。

全国代議員会、一時延期

日本協会は10月19日に予定した全国代議員会の一時延期を決めた。

これは、同会議の重要案件とみられた「50年度予算」が7月31日の緊急招集(本誌前号既報)で可決され、「オリンピック男子アジア予選」も同日までに具体化する見込みがうすいためにとられた措置で全代議員へ文書連絡の結果9月15日現在、44代議員(定数=52名)の「同意」を得たもの。

新しい日程は未定。

賑やかにプレ五輪壮行試合

プレオリンピックに出場の全日本男子（荒川清美団長ら役員3、選手14）チーム壮行試合は、9月7日午後2時35分から東京体育館で壮行式に引きつづき日本選抜との間で行われ、詰めかけた約三千の観衆を前に、豪快な攻守を示して快勝した。

この試合に先立って全日本女子（第6回世界女子選手権候補選手）が公開試合を行った。

壮行試合・日本代表対日本選抜は、午後3時6分から日本選抜のスローオフで開始。審判＝安藤純光、岡前義春。

日本代表 17（11−3, 6−7）10 日本選抜

▽FPその他の出場者【代】飯田（大崎電気）得1、穂積（湧永薬品）得0

○……昨年9月の東独戦以来久々のナショナルチーム登場とあって会場は終始沸いた。

結果は、順当に代表チームが勝ったが、選抜軍も個人技を中心に味のあるプレーを随所に見せて試合を盛りあげた。

代表チームで注目されたのは、日本の課題といわれつづけてきたディフェンス面が強化されたことだ。

得	【日本代表】		【日本選抜】	得
0	本田（大阪イーグルス）	GK	柳川（大同製鋼）	0
0	柴田（法政大）	GK	斉藤将（日体大）	0
6	藤中（大同製鋼）	FP	近森（三陽商会）	0
3	佐藤（本田技研鈴鹿）	FP	野田（大同製鋼）	2
1	菊池（東京12ch）	FP	早川（大阪イーグルス）	1
1	村田（法政大）	FP	氷海（千葉教員）	1
0	中井（大同製鋼）	FP	佐々木（三景）	2
3	木野（湧永薬品）	FP	津川（湧永薬品）	0
0	松原（大同製鋼）	FP	新実（本田技研鈴鹿）	3
0	蒲生（中央大）	FP	平野（海上自衛隊下総）	0
1	花輪（大同製鋼）	FP	斉藤幸（日体大）	1
1	柳川（大同製鋼）	FP		
17	（0）	PT	（0）	10

特に、前半の遠く確実な守りはみごたえのあるものだった。

プレ大会―アジア予選と大事を前にしたここへ来て、攻守のバランスがとれてきたようなのは国内試合とは云え今後の活躍が期待できる試合ぶりであった。

（青木敬子）

▽女子公開試合

全日本女子A 20（9−4, 11−4）8 全日本女子B

○……2週間にわたる強化合宿の中間日とあって、両チームとも疲れがのぞき、これは、と云ったプレーは少かった。

得	【全日本女子A】		【全日本女子B】	得
0	和田（立石電機）	GK	久保（田村紡）	0
0	渡辺（日本ビクター）	GK	鈴木（日本ビクター）	0
5	古佐原（東京重機）	FP（審・佐野 大塚）	菊地（東京重機）	0
4	島田（立石電機）	FP	穂積（日本ビクター）	0
1	蔵田（立石電機）	FP	加藤（日本ビクター）	1
3	松下（田村紡）	FP	河田（田村紡）	6
2	額賀（日本ビクター）	FP	紀野（立石電機）	1
4	山下（立石電機）	FP	桜庭（日立栃木）	0
1	大場（大崎電気）	FP	小森（ブラザー工業）	0
		FP	有賀（東北ムネカタ）	0
20	（0）	PT	（0）	8

特に、詰めの甘さは、今後の強化調整の課題として残ろう。

Aがキャリア豊かな選手を揃えただけあって順当勝ちしたが、Bでは河田の鋭い踏みこみが光った。

激しい競争をつづけているGK陣は、先発の和田、久保がすっかり安定、前半を引きしめた（杉山）

東京で5年半ぶりの開催

□……東京で海外遠征チームの壮行試合が行われるのは、45年1月25日、駒沢体育館での第7回世界男子選手権代表―関東選抜以来5年7ケ月ぶりとあって、ファンの出足は上々。

男女全日本の勢揃いと云うのも初めてだし、モルテンボールIHF公認記念のボールプレゼントなどもあり、館内は、賑やかな歓声がたえず、日本協会企画担当、都協会理事長と〝二枚看板〟の滝口三郎常務理事も、ホッとした表情だった。

国内サーキット復活へ

日本協会技術部と男子ナショナルチームは、かねてから国内サーキット（各地転戦試合）の再開を検討していたが、今秋11月中旬、「プレオリンピック報告試合」として九州を主に日程編成するようこのほど内定をみた。



久々に東京で試合を見せた全日本女子。Aチーム額賀の闘志あふれるポストプレー （撮影・山田真市）

国内サーキットは、ミュンヘンオリンピック前に、それまで散発的だった全日本チームと地元チームの公開試合をシリーズ化させ、44年9月3日から19日まで熊本、下松、氷見などで試合を行い好評を得た（＝本誌69号参照）。

しかし、その後は、ナショナルチーム側の要望がありながら他大会との調整や、受け入れ先の事情で途絶えていたもの。

今回は、公開試合のほか、講習会、全日本の紅白戦なども計画されている。

全日本OBの名簿

昭和31年秋に西ドイツナショナル（11人制）と戦った以降の、全日本男女選手と役員、国内渉外関係者を網らした名簿が、前全日本監督・村田弘氏の手でまとめられた。

記載されている氏名は〝現役全日本〟を除く男子選手78名、女子選手49名、役員など29名で、すべて現住所入りという労作である。

ハンドボールは八八四人に

〜佐賀国体の縮少決定〜

チーム配分新案の作成へ

日本体協は、9月3日の理事会(東京)で、来年の佐賀国体秋季大会の総参加人員を一万四千二百四十一人に正式決定した。

この数字は、今月行われる三重国体の一万六千五百人より、約二千二百人下回り、これによって全25競技それぞれ来年の大会は、今秋の規模を確保できず、ハンドボールも15%減の884人に縮少される

三重国体のハンドボールは、一〇四〇人の枠があり、4部門5種別80チームが参加できるが、佐賀国体は68チームにおさえねばならず日本協会では近く、種別配分の原案を作成する。

…………主な球技の参加人員(本誌調べ)…………

	(三重国体)	(佐賀国体)	削減率
ハンドボール	1,040人	884人	15%
バスケットボール	1,235	1,051	14.9%
バレーボール	1,235	1,001	19%
サッカー	960	832	13.5%
ラグビー	640	480	25%
ホッケー	396	364	8.1%

◇

国体は、開催県の実情によって参加人員規定のうちA一万六千五百人、B一万四千五百人、C一万二千五百人のいずれかをとることができる。

佐賀国体はBランクにあたるわけだが、佐賀県がこの大会を誘致しようとした時は、Aランクを打ち出していたため、その後、市町村財政の苦しさなどを理由に、縮少を申し出たことにはかなりの反撥が競技団体側にあった。

日本協会・荒川理事長は「この問題がくすぶりはじめてから半年近くなる。佐賀県はCランクに縮少することを希望していた」と云っており、その後、いろいろな曲折があって、ようやく今回の数字に落ち着いたものである。

今年より12チームを削減

この決定によって、日本協会は早急に、種別の配分数を決めなければならない。

縮少はさけられずとみて、7月31日の全国代議員会(東京)で、参加人員確定後の配分原案の作成は執行部に一任されており、荒川理事長は、10月11日の月例常務理事会で作業を予定しているが、今秋より12チームの削減だけに、議論が沸きそうだ。

これまでの計画は、別表のとおり、48年11月11日の全国理事会で決めた成年男子32チーム、同教員10、成年女子10、少年男子10、少年女子18。どう削りとるか、たしかに難しい。

どうする少年男女の〝回転〟

日本体協が、ハンドボールに示した884人(68チーム)の算定は、成年男子20チーム、その他種別各12チームというもので、荒川理事長は「68の中なら手なおしができるハズ」としており、体協に確認後、日本協会独自の割りふりをする意向を明きらかにしている。

ご承知のように、国体は各ブロック及び開催県から、各種別最低1チームの参加が義務づけられており、成年教員10、成年女子10、少年男子10は、まず確定的である

問題は残り38を成年男子一般と少年女子にどう振り分けるかだ。

三重国体を機に、少年部門は、男女で28チームを「18・10」に分けて1年毎に回転させることを決めており(=本誌115号参照)、佐賀国体は「男10、女18」の年になる。

この内規を優先させれば、成年男子一般は20に縮少されてしまうわけで、この辺に議論が集まろう

一般男子20チームに議論か

仮に、少年を男、女各10とすれば、成年男子一般は28を得られるが、すでに少年女子関係者は「来年は広き門」と待ち望んでおり、10におさえこむのは難しいという見かたが強い。それに、明後年以降の回転も、すべて一つづつ狂わしていかなければならない。

そこで考えられるのは、一般に教員を吸収して30とする案だ。

今年まで教員に出ていたチームは、来年は一般の予選にまわるわけだが、1年前に種別の変更を行うのは許可されそうもない。

荒川理事長は、各都道府県協会の意向をアンケート、参考にするつもりのようだが、はたしてどのような結着をみるか注目される。

なお、1チームの参加人員13名(監督1、選手12)を、12名(監督1、選手11)にして、チーム数を73(876人)とすることは、認められない。

御破算になった
佐賀国体の配分

	成年男子一般	教員	成年女子	少年男子	少年女子
北海道	1	1	1	1	1
東北	4	1	1	1	2
関東	6	1	1	1	2
北信越	3	1	1	1	2
東海	3	1	1	1	2
近畿	5	1	1	1	2
中国	3	1	1	1	2
四国	2	1	1	1	2
九州	4	1	1	1	2
佐賀県	1	1	1	1	1

(昭49.11.11 全国理事会決定による)

10月27日から三重国体，80チームが熱戦

年令別初採用による第30回国体（秋季大会）は10月26日から10月31日まで三重県下で開かれる。

ハンドボールは27日から31日まで、四日市市四日市高校グランドを主会場に、4種別5部門80チームが参加して行われるがすでに都道府県ーブロックと激しい予選を勝ち抜いた精鋭が勢揃いしている。

注目の組み合わせ決定が、本誌〆切り後の9月27日（東京）とあって栄冠の行方をめん密に占うことはできないが衣替えした〝新生国体〟の話題をいくつか拾ってみることにした。

なお、各部門で優勝候補と呼び声の高いのは、少年男子が山口、東京、大阪、鹿児島、三重、沖縄、同女子が石川、秋田、大分、大阪、山口、成年男子・一般が愛知、三重、大阪、東京、同・教員が大阪、三重、茨城、成年女子が三重、熊本、愛知、茨城らである。

（編集委員会）

話題1　少年に新しい流れの芽

18才を境に成年（男女）、少年（男女）に大別するという新システム。

ハンドボール界は、成年男子をさらに一般、教員と分けたが、過去29年の歴史をぬりかえる年令別採用は、注目に価しよう。

特に、これまで少年層が「高校」の名で限定されていたことを思えばその間口は大きく広げられ、文部省（主催者の一つ）が狙う「誰でも参加できる国体」への第一ステップとみてよい。

しかし、今年はやはり旧来の傾向が根強く残り、少年部門は、どの都道府県予選も、いわゆる高校チーム（単独または選抜）が圧倒的だったようで、例えば中学OBクラブや地域単位の少年チームが主流となるには、かなりの時間がかかりそう。

そうしたなかで、三重少年選抜が、高校生以外にも人材を求め男子に川上（本田技研鈴鹿）、地頭所（鳥羽商船高専）、女子に若田（田村紡）を加えているのは評価してよい。

三重以外で32年4月2日以降生まれの社会人をピックアップしているのは、本誌調べでは、群馬少年選抜～予選敗退～の市村（藤岡ク、自営）だけ。

三重が今大会で、それなりの成績をあげると、来年以降は、この新しい流れの強まりが望める。

話題2　3冠王狙う大同製鋼

成年での注目は、今年も愛知代表となった大同製鋼の試合ぶりだろう。

昨年、一昨年と全日本3大タイトル（全日本総合、日本実業団リーグ、国体）独占に成功、今年勝ちつづければ「3年連続3冠王」という大偉業が成る。

すでに、6月の日本実業団リーグで優勝を決め、幸先よいスタートを切ったが、第2の関門をどう乗りきるか。

選手たちは、固くなるどころか野望達成へ斗志をみなぎらせているが、必ずしも楽観材料ばかりではない。

特に、8月の東海選手権で苦杯を喫した本田技研鈴鹿（三重）が、地元の利を活かして、大きく立ちはだかり、また、日本実業団リーグのライバル湧永薬品も大阪代表となって雪じょくを狙っている。

主力の藤中、中井、松原、柳川弟、花輪5選手が、プレオリンピックから帰って3週間程度しかたっていないのも、コンディショニングに影響なしとはいえまい。

波乱含みの一本勝負（ナックアウトシステム）だけに、大同独走の予断は許さず、エキサイトした展開はみものとなろう。

話題3　偉業に挑む小松市女高

石川代表となった小松市女高のタイトル独占意欲も、大同に劣らない。

小松市女高は、48年度にも全日本高校、国体両大会制覇を遂げており、この記録は同校を含めて8校が史上にマークしているが、2回達成となると、さすがに例がなく、35年度に熊本市立高が決勝（国体）で涙をのんだのが最高。

それだけに、小松市女高としては、是非とも、今年のトライを成功させたいところだ。

三重国体出場チーム①

【少年男子】

北海道（函館有斗高）
秋　田（全秋田高校選抜）
宮　城（仙台育英高）
茨　城（茨城高校選抜）
東　京（東京高校選抜）
石　川（小松工高）
福　井（福井高校選抜）
静　岡（静岡高校選抜）
愛　知（愛知高校選抜）
三　重（三重選抜）
大　阪（全大阪高校選抜）
広　島（広島高校選抜）
山　口（岩国工高）
愛　媛（宇和島南高）
香　川（三本木高）
鹿児島（鹿児島高校選抜）
沖　縄（沖縄高校選抜）

【少年女子】

北海道（函館商高）
秋　田（和洋女高）
茨　城（茨城高校選抜）
石　川（小松市女高）
静　岡（清水市商高）
三　重（三重選抜）
大　阪（大阪高校選抜）
山　口（徳山高）
愛　媛（新居浜市商高）
大　分（大分高校選抜）

三重国体ブロック代表決定戦記録　（太字が代表）

◇北海道

▽成年男子・一般
函館有斗ク　26－14　函館大谷ク
▽同・教員
鶴陵ク　36－15　鶴陵クB
▽少年男子
函館有斗高　31－5　函館中部高
▽少年女子
館函商高　10－6　室蘭商高
▽成年女子
室蘭OGク　23－6　函商OG

◇東北

▽成年男子・一般＝福島（福島SGク）、宮城（仙台育英高OB）、**青森**（青森ク）、岩手（盛岡商友会）
▽同・教員＝福島
▽成年女子＝福島（東北ムネカタ）
▽少年男子＝秋田（全秋田高校選抜）、宮城（仙台育英高）
▽少年女子＝秋田（和洋女高）
（注）東北予選の記録は本誌30頁「東北国体」の記事参照

◇北信越

▽成年男子・一般第1、第2代表決定戦
長野（全長野）　24－4　新潟（柏崎ク）
富山（氷見ク）　26－9　福井（北陸電力）
▽同第3代表決定リーグ
福井　16－12　新潟

夏の勝ちっぷりからみて「大いに可能性がある」（嶋田高体連副部長）が、国体は、ピックアップが許されているだけに、夏よりもいっそう強敵揃いだ。

簡単に勝ちあがっていくことは難しいが、小松セブンの気力を期待したい。

話題4　異色の北国銀行

成年女子・石川代表は、北国銀行を名乗っているが、同行に勤めているのは西出久、北村早、島野越栄、鍋島（元ブラザー工業）の5名だけ。

竹下（旧姓北岡、元世界選手権代表）、山際、千歩らあとの7名は、小松市内の企業や学校に籍があり、いわば「オール小松OG」。

「小松市女高の2度のインターハイ制覇であがった地元のハンドボール熱と、社会人になった有能選手の技術をなんとか活かそうとウチが乗り出した」とは大門重樹監督の話だが、企業の新しいバックアップとしてユニークな存在だ。

もちろん、チーム結成の動機は今春、西出久選手らが入行したことだが、「実業団への登録は選手の所属先が単一事業所でなければならないので当分考えない。あくまで〝地元のクラブ〟を目指す」（大門監督）というから、これからもこのチームの最大目標は、国体になるわけ。

筋金入りの選手揃いとあって、北信越予選では81得点、12失点（3試合通算）と桁違いの強さ。本大会での試合ぶりが楽しみだが、日本協会・荒川理事長も「企業のこうした応援は嬉しい。高校界で活躍した女子選手が、卒業後も地元で組織的にハンドボール活動をつづけられるのはすばらしい」と注目している。

話題5　田村会長のおひざ元

会場となる四日市市は、日本協会・田村正衛会長のおひざ元。ハンドボール史上でもこれは初めてのことだし、他競技でもあまり例がない。

しかも、同会長がオーナーの田村紡（三重）は成年女子の有力優勝候補。

6月の日本実業団リーグで優勝を飾っており、この大会で勝てば12月の全日本総合制覇も夢でなくなり、42年度につづく国内3大タイトル独占が、にわかに有望となってくる。

このほか、大阪イーグルスが8度目の全日本教職員、国体教員の二冠獲得を目指すほか、成年女子で熊本代表となった立石電機が、初の全国タイトルを掌中におさめるか、も興味深い。

予選での波乱は、今夏の全日本高校男子で優勝した清水高を主力とした千葉高校選抜が、関東予選で茨城高校選抜に第2延長の末15—16で敗れている。

話題6　総合優勝の行方は

◆天皇杯（男女総合優勝）、成年男女に決め手を持つ三重、愛知、成年男子と教員に自信のある大阪が残りの部門でどうポイントしあうかが焦点である。

これを追ってフルエントリーの北海道や、4部門出場の茨城、山口、静岡、愛媛が常識的には有利だが、少年に得点源のある石川、秋田らも、成年や教員で番狂わせがおこり得点が割れてくると浮上のチャンスがある。

少年男子が18チームと増えて星勘定を難しくさせている。

◆皇后杯（女子総合優勝）、成年、少年両部門に代表を送っているのは北海道、石川、茨城、三重、大阪、山口、愛媛の7県。当然ここが有利となる。

あえてしぼれば茨城、三重、石川か。

過去7回優勝の熊本は成年の孤軍奮斗で、今年は苦しい。

三重国体出場チーム②

【成年男子・一般】

北海道（函館有斗ク）
青　森（青　森　ク）
岩　手（盛岡商友会）
宮　城（仙台育英高OB）
福　島（福島SGク）
栃　木（AOK栃木）
群　馬（富　岡　ク）
千　葉（海上自衛隊下総）
埼　玉（大崎電気）
東　京（三　　景）
神奈川（全神奈川）
長　野（全　長　野）
石　川（金沢市役所）
富　山（氷　見　ク）
静　岡（静　農　ク）
愛　知（大同製鋼）
三　重（本田技研鈴鹿）
岐　阜（二和家具工業）
京　都（京　都　ク）
大　阪（湧永薬品）
奈　良（生　駒　ク）
和歌山（丸善石油下津）
兵　庫（神戸製鋼所）
岡　山（倉　敷　ク）
広　島（三菱レ大竹）
山　口（徳　山　ク）
愛　媛（住友化学菊本）
高　知（高　知　ク）
福　岡（ブリヂストンタイヤ）
長　崎（佐世保ク）
鹿児島（自衛隊鹿屋）
沖　縄（沖縄選抜）

【同・教員】

北海道（釧路教員鶴陵ク）
福　島
茨　城
静　岡
三　重
福　井
大　阪（大阪イーグルス）
岡　山
高　知
鹿児島

【成年女子】

北海道（室蘭OGク）
福　島（東北ムネカタ）
茨　城（日本ビクター）
石　川（北国銀行）
愛　知（ブラザー工業）
三　重（田　村　紡）
大　阪（寝屋川ク）
山　口（徳　山　ク）
愛　媛（新居浜市商OG）
熊　本（立石電気）

石　川（金沢市役所）25—6新　潟
石　川20—6福　井
【順位】③石川④福井⑤新潟

▽同・教員
福　井19—9富　山

▽成年女子
石　川（北国銀行）27—10長　野（小商ク）

▽少年男子第1、第2代表決定戦
福　井（高校選抜）17—16新　潟（高校選抜）
石　川（小松工高）15—14富　山（高校選抜）

▽少年女子
石　川（小松市女高）11—3新　潟（江南高）

◇関東

▽成年男子・一般第1〜第4代表決定戦
神奈川（全神奈川）18—14群　馬（富岡ク）
東　京（三景）30—17栃　木（AOK栃木）
千　葉（自衛隊下総）24—12山　梨（甲府ク）
埼　玉（大崎電気）27—12茨　城（自衛隊勝田）

▽同第5、第6代表決定戦
群　馬16—13茨　城
栃　木37—8山　梨

▽同・教員
茨　城19—12千　葉

▽成年女子
茨　城（日本ビクター）13—11東　京（東京重機）

▽少年男子第1、第2代表決定戦

茨城（高校選抜）16－15 千葉（高校選抜）
東京（高校選抜）13－11 神奈川（高校選抜）
▽少年女子
茨城（高校選抜）11－4 千葉（高校選抜）

◇東海

▽成年男子・教員決勝リーグ
静岡 19－8 岐阜
愛知 14－11 岐阜
静岡 10－2 愛知
【順位】①静岡②愛知③岐阜

▽成年女子決勝リーグ
愛知（ブラザー工業）36－2 岐阜
静岡（浜南ク）13－4 岐阜
愛知 22－2 静岡
【順位】①愛知②静岡③岐阜

▽少年男子決勝リーグ
静岡（高校選抜）8－7 岐阜（高校選抜）
愛知（高校選抜）17－10 静岡
愛知 13－7 岐阜
【順位】①愛知②静岡③岐阜

▽少年女子決勝リーグ
静岡（清水商高）10－6 愛知（高校選抜）
愛知 9－6 岐阜（高校選抜）
静岡 16－3 岐阜
【順位】①静岡②愛知③岐阜

◇中国

▽成年男子・一般決勝リーグ
鳥取（境港市）36－8 島根（松江ク）
山口（徳山ク）16－15 岡山（倉敷ク）
広島（三菱レ大竹）18－12 鳥取
広島 20－11 山口
岡山 33－10 島根
山口 46－6 島根
広島 30－9 岡山
山口 28－13 鳥取
広島 不戦勝 島根
岡山 没収試合 鳥取
【順位】①広島②山口③岡山④鳥取⑤島根

▽同・教員
岡山 12－10 山口

▽成年女子
山口（徳山ク）15（延）14 広島（広島選抜）

▽少年男子決勝リーグ
山口（岩国工高）19－9 岡山（津山工高）
広島（高校選抜）16－14 島根（県選抜）
岡山 22－12 鳥取（倉吉工高）
山口 18－11 広島
鳥取 14－10 島根
広島 19－12 岡山
山口 20－5 島根
広島 20－13 鳥取
島根 17－15 岡山
山口 36－1 鳥取
【順位】①山口②広島③岡山④島根⑤鳥取

▽少年女子
山口（徳山商）11－5 広島（高校選抜）

◇四国

▽成年男子・一般決勝リーグ
愛媛（住化菊本）15－10 高知（高知ク）
香川（瀬戸ク）28－21 徳島（教育航空群）
高知 19－11 徳島
愛媛 24－10 香川
高知 25－11 香川
愛媛 26－11 徳島
【順位】①愛媛②高知③香川④徳島

▽同・教員
高知 28－19 香川

▽成年女子決勝リーグ
愛媛（新居浜市商OB）不戦勝 高知（高知ク）
香川（三本松OG）不戦勝 高知
愛媛 11（延）9 香川
【順位】①愛媛②香川③高知

▽少年男子決勝リーグ
徳島（池田高）18－13 高知（高校選抜）
香川（三木松高）19－3 愛媛（宇和島南高）
香川 20－7 高知
愛媛 14－8 徳島
香川 19－4 徳島
愛媛 26－6 高知
【順位】①香川②愛媛③徳島④高知

▽少年女子
愛媛（新居浜市商）29－7 高知（高校選抜）

◇九州

▽成年男子・一般第1、第2代表決定リーグ
沖縄（沖縄選抜）24－13 佐賀（神埼ク）
鹿児島（自衛隊鹿屋）24－22 大分（新日鉄大分）
沖縄 27－19 鹿児島
沖縄 26－22 大分
鹿児島 36－18 佐賀
大分 31－19 佐賀
【順位】①沖縄②鹿児島③大分④佐賀

▽同第3、第4代表決定リーグ
長崎（佐世保ク）39－13 宮崎（宮崎ク）
熊本（熊本）23－18 長崎
熊本 22－17 宮崎
福岡 33－21 宮崎
（ブリヂストンタイヤ）
長崎 18－15 福岡
福岡 17－13 熊本
【順位】①長崎（得失点差24）②福岡（13）③熊本（6）④宮崎

▽同・教員
鹿児島 26－13 大分

▽成長女子決勝リーグ
熊本（立石電機）38－5 大分（大分東シニア・ク）
熊本 26－5 佐賀（県一般女子）
佐賀 18－13 大分
【順位】①熊本②佐賀③大分

▽少年男子第1代表決定戦
鹿児島（高校選抜）17－10 長崎（口加高）

▽同第2代表決定戦
沖縄（高校選抜）19－14 福岡（高校選抜）

▽同女子
大分（高校選抜）15－9 福岡（高校選抜）

（注）近畿は記録未着。

読者投稿特集

危機に立つ日本協会財政

この企画のしめくくりとして
今回は読者の投稿を集めた

チーム増加が先決

日本協会の台所の苦しさは、マスコミなどで以前から"貧乏世帯"というような表現をされていただけに、うすうす知っていたが機関誌や友人の役員（地方協会の）からの知識で、想像以上に乏しいことが判った。

この危機を打開するため、いろいろ策をこうじられているようだが、全般的な不況もあって、おいそれと前途は開けまい。

やはり、あくまで地道に、登録チームを増やす努力をつづけ、底辺から盛りあがった資金をベースに考えるべきではなかろうか。

競技人口増加以外に、財源を潤す手だてはないと思う【東京・坂倉秀一】

新しい財源確保が急務

日本協会が、機関誌で知るかぎりでは、ピンチの財政を建てなおすため、底辺～つまりチーム、個人～に負担をはね返すのをさけようとして新しい財源確保に心がけているようなのは評価してよいだろう。そしてそれは急務だ。

これまでにも、チーム（強いては個人）は、いろいろな協力をしてきた。現実に今も、オリンピック基金を義務づけられている。

なにかコトを起こすたびに、安易に底辺の「頭数」を頼りにする施策に、時にはふんがいしたものだ。

酷な表現だが、今、そうした策をさけ、新しい道を見出そうとしている努力は買うが、遅きにさえ失している感じも否めない。【千葉市・木川志津男】

全役員の連帯感を

日本のハンドボール界が、あらゆる事業につきあって、財政が苦しくなったのは、同情される。

もし、日本協会が一つでも事業を見送るようなことがあったら、その時はその時でハンドボール界内は「伸びようとする芽をつんだ」といった非難な声が満ち、消極策を攻撃されたに決まっている。

ここ数年、日本ハンドボール界が、かなりムリをして行ってきた事業は、いずれも大たんで、しかも将来への種蒔きになり得るものばかりだ。

今がいちばん苦しい時だと思う役員協力金を突破口にしようとしているような連帯感が必要だと思う。【鎌倉市、F・S生】

地方協会へツケを廻すな

日本協会が、49年度決算で一千万円をこす赤字を計上した最大因は、年度末に強行した女子の世界選手権アジア予選にあると思う。

国際舞台への参加は、それなりに意義あることだが、現在の全日本女子の実力に、はたして苦しい財源を投じる価値があるかどうか疑問だ。

また、密室試合の開催についても、余剰金を食いつぶした責任というものが、明きらかにされていない。

欠損を招いては、そのたびにそのツケを地方協会へまわしてくる中央の安易な姿勢は、反省されてしかるべきである。【愛知協会一理事】

ＯＢの協力求めよ

日本協会が財政危機に見舞われているのは、平生、ＯＢに対する接触を怠っていた報いではなかろうか。

日本のハンドボールもすでに30年をゆうにこし、この間に巣立ったＯＢの数も、全国ではおびただしいものであろう。

中には、社会的にも評価・成功されている人も多いはずだ。

甘い考えかもしれないが、その人たちを頼っていけば、なんとか協力してくれるのではないか。

しかし、今はとてもそれを望めない。

何故なら、かつての日本協会は一部の人間の独走で、「世論」を無視しつづけ、多くの顔を横にそむけさせたからだ。

危機に直面して、日本協会はすべてを点検しなおすべきだ。

【川崎市・一ＯＢ】

"浄財主義"は時代遅れ

今さら赤字をとやかく云ってもはじまらない。

将来展望をしっかり立て、資金のバックアップをうけられる体制を一日も早くつくりあげるべきであろう。

例えば、企業、ＯＢなどによる「日本ハンドボール協会後援会」といったものを組織し、なににどれだけお金がかかるかを計上すべきだ。

それでもなおバランスがとれない場合は、世界選手権への参加を一回見合す、ぐらいの決断も必要だろう。

小さな情熱をたよって集める"浄財"主義も結構だが、それはいささか時代遅れなセンスだと思う

【無記名＝大阪東局消印】

「技術書」刊行などで収入

新しい収入源を考える以外に、危機といわれる日本協会財政の行く道はない。

例えば、いま地方などで愛好者が、いちばん欲しがっている物は「技術書」なのです。

何冊かの技術書は出来ていますが、そうしたものを、日本協会の名で刊行したらどうか。

再三、世界選手権などへ出かけながら、ヨーロッパの一流技術が紹介された例はない。

このほか「インターハイ・グラフ」とか「全日本総合選手権特集号」などを出せば、どうなのか。

日本協会内に事業部を新設するのも一策だと考える。

【静岡、T・T生】

国庫補助増額の運動を

日本協会財政をさらけ出されてみて痛感したのは、国庫（体協）補助があまりにも低額なことだろう。

これは、ハンドボール協会に限らず、あらゆるスポーツ団体に共通したテーマであろうから、横の連けいを密にして、関係筋への働きかけを行うべきだ。

どのような方法をこうじたにせよ、競技団体のしぼり出せるお金などは、タカが知れている。

競技者や愛好者が小づかいをはたいて集めたお金は、還元が建前であり、それでトッププレイヤーの強化や遠征、国際審判員の養成などを行おうとすれば、はみ出すに決まっているし、第一筋違いだ。

体協や関係官庁（文部省あるいは厚生省なのか？）に、アマチュアスポーツの台所を説明して理解を求める努力を提案したい。

【兵庫・神戸球児】

迎えよ企業依存時代

結論からいえば、企業依存時代が来たと思う。そして、それを果たさねば、日本協会財政は、永久に危機を脱し切れない。

他のスポーツを見給え、すべてトップチームは、いわゆる実業団だ。彼らは、少々、その企業の宣伝嗅はあっても、結局は、そのスポーツの発展に寄与し、大いなる貢献を遂げているのだ。

ハンドボール界は、あまりにも純粋。それを誇りにするならば、あくまで清貧に甘んじ、やれオリンピックだ、世界選手権だなどと騒がぬことである。

学連、高校界関係者による協会運営の限界を示したともいえる〝経済危機〟ではなかろうか。

【東京八王子市、一読者】

計画・長期性のある展望必要

ハンドボール界の中央組織・日本協会が危機に立てば、全ハンドボール人が協力して再建の力ぞえするのが筋道だ。地方協会を通じての負担増も仕方がない。

しかし、日本協会ももっと計画性、長期性のある展望を心がけるべきだ。出たとこ勝負のような印象を受けるし説得力にも乏しい。財政だけではなく、すべてに「このままではいけない」という感じが強いのだが、どうか。

【東京・植田修司】

日本協会財政への質問と回答

問 日本協会は全国大会にどの程度の補助をしているのか。また、それは、どの勘定科目に含まれているのか。

答 50年度は全日本総合、全日本学生、全日本教職員、全日本高専、全日本自衛隊、全日本高校各選手権、全国実業団トーナメントにそれぞれ10万円、全国中学生大会に70万円が計上されています（総額140万円）。中学大会は普及指導部中学委員会費、その他は総務企画部事業費です。

問 国内球界を支えているのは高校界と思うが、そこへの還元はどの程度なされているのか。

答 50年度高校チームからの総登録料は二、三三一〇〇〇円。高校関係への支出予算は日韓高校交流費20万、全国高体連運営助成金10万、全日本高校選手権10万、全日本高校選手権審判員補助費約5万となっており、高校総登録料の19％にあたる〝還元〟です。

問 支出のなかに人件費とあるが、競技団体役員は無報酬、奉仕がたてまえなのではないか。

答 会長、理事長など日本協会役員はすべて無報酬です。

人件費は、事務局に勤めていて下さるかた（49年度は男女各1名）の給料です。

役員だけで、事業一切を切り廻すことは、とうてい無理で、有給職員については、日本協会規約第5章第26条にも明記されています。

問 国際試合の時、日本協会へ納入するお金は、なにに使われるのか。

答 来日チームの日本における交通費、ポケットマネー（一人一日千円程度）移動にともなう宿泊費などにあてられます。納入金の余剰は日本協会々計へ繰り入れるのを原則とし、最近の収益額は本誌133号23頁を参照して下さい。

問 審判審査料は審判部事業に使用されるのか。

答 一般会計へ入れられるため、特に使途が審判部に限定されてはいません。

ちなみに審査料収入は47年度が約40万、48年度が約37万、49年度が約65万円。

問 海外遠征の場合の、選手の待遇について

答 待遇という意味がよく判りませんが、世界選手権などを含めて、その国の首都までの航空費は往復日本側負担、それにブレザーコートなど身廻品雑費などでいつも団長以下全員に15～30万円程度の「自己負担」が課せられています。

問 全日本選手の強化合宿（国内）の経費は

答 49年度までは、原則として、学生、高校生選手は旅費・宿泊費の全経費を日本協会負担、社会人選手は宿泊費のみ日本協会負担でした。今年度は未決定ですが、いっそう厳しい条件となるでしょう。

★……この7問は本誌あての質問及び、別掲10氏の投書内に記されていたものです。回答はすべて編集委員会。

7月以降、日本協会財政について、本誌あて送られた投稿は14通、そのうちの10通を紹介しました。いずれも誌面の都合で原文を一部割愛させていただきました。（編集委員会）

2年ぶりに日韓高校交流開く

小松市女1勝1敗、岩国工は2分け

第9回（女子第2回）日韓高校大会～第7回日韓高校スポーツ交歓競技会～は8月20日から26日まで、男子・岩国工(山口)、女子・小松市女（石川）が遠征してソウルで各2試合が行われた。

昨年は大会直前休会となり、2年ぶりの交流、男女とも、両国の実力はいちだんと伯仲し、岩国工は2戦とも引き分け、小松は1勝1敗だった。

これで通算成績は男子が日本側の26戦8勝4分14敗。女子が日本側の4戦2勝2敗。

来年度の大会は日本で行われる予定。

岩国工監督　青木　操

8月22日、話に聞いていた円形の奨忠体育館で開会式が行われたが、36度で蒸風呂のような暑さで来賓席は団扇の波だった。式を終えて私達一行は専用バスで永東高校体育館に行った。この体育館は本年造られた真新しい体育館で観客二千人を収容できるもの。2階はスタンド席で、電光計時板が設備され、コートは40m×20mが充分にとってあった。又ゴールその他の備品も新品で、日本で聞いていた心配は全くなかった。16時30分、スタンド満席の中で第1戦、韓国一位の朝鮮大附高と対戦した相手は2・4のディフェンスで、前の2人が極端に前に出て、一人が泉をマークし、一人は中央、右45度を守り、他の4人は夫々マンツーマン気味にチェック・マークしていた。それもボールを持たないプレーヤーに押したり引いたりで動きがとれなくなり、ポストは握られてタイミングが合わず、攻撃のパターンが反則でこま切れされフリースローと速攻に頼る以外になかった（フリースロー得点6）。朝大附は金・左投（180㎝）が中心で、右45度から中央に切り込みトップブロックと合わせてフェントをかけ左に流れてのジャンプシュート・それも左右に投げ分けて4得点、ポストプレーで誘発してPT2本を決めて6得点をあげたのが目立った。10対8とリードして後半に入ったが、今度は岩工得意のフリースローは3m内防禦で全く不能になった。勝ちたい余りに、親善試合で気になったが、4番金を20分過ぎマークした。その後の相手はフェントとポストプレーだけになった。勝てる試合も結局引分けに終った。第2戦は24日、韓国二位の東星高と同じ体育館で同じ時刻に相手のスロー・オフで始まった。この相手も2・4ディフェンスの地域防禦で動きは良くなかったが、当りは前回より強烈だった。攻撃は張（187㎝）が中心だったが打点が低いので威力はなかった。攻撃は8字ローリングで、ポスト・スカイプレーを使い、時折フェントでPTを多くを誘発させた。（PT7本）。しかし困ったことは顔や横腹にシュートして来ることだった。後半17分過ぎ12対14でリードされた時、遂に泉が顔面に張のシュートをまともに受けて3分間出場不能になりベンチにさげた。しかし何とか勝ちたいので残り4分、泉を出して、PTとロング・シュート2本を決めて同点とし、岩工の速攻がセンター・ラインを越えたところで、タイになった。この試合でPT6本をとられ、岩工のフリースローは1本も打てなかった。韓国は20チームに足らない中からのチームとしては強かった。しかし20才、19才の選手が主力になっていたので驚くには及ばない。一番の問題は審判の見解の相違で、フリースローで3m離れないこと。デフェンスの死体のラインクロース。シュート体勢のボール・カットが全部だったこと。粗暴行為が警告で片着けられることだった。最後にハンドボールの立場からすればこの遠征は莫大な経費をかけるわりに見返りが少ないのではなかろうか。

◆お詫び・本誌前号で、日韓高校交流、男子に全日本高校選手権優勝校の清水高（千葉）が遠征しているようにお伝えしましたが、岩国工（山口）の誤りでした。お詫びして訂正します。

清水高の渡航手続きが間に合わず、代って同選手権2位の岩国工が急きょ派遣されたものです。

岩国工3年　泉　賀都彦

八月二十日、十一時五十分、我々選手団は韓国金甫空港に着いた空港ではブラスバンドで多くの人々に暖かく迎えられた。気温三十六度、韓国では五十年振りとかの暑さのもとで二試合を行なった。

二十二日、第一戦は韓国一の朝鮮大附属高校だった。このチームは四・二のディフェンスでトップの二人が四十五度のシューターを密着マンツウ気味だった。ユニホームは引っぱる、ライン内防禦はする、後から巻き着く、日本では考

えられない荒いディフェンスだった。オフェンスはブロック攻撃、フェントシュート・バネのきいたサイドシュートなど良いものを持っていた。しかしこれといった決め手がなく、金、張が中心だった。結果は十三対十三の引分けに終ったが、押し気味の試合だっただけに残念でならなかった。

二十四日、第二戦は東星高校だった。このチームも四・二のディフェンスで第一戦より激しい当りだった。オフェンスは一八七cmの張選手が中心で、顔のまわりをシュートしてくるには困った。遂に顔面に直撃されて三分間出場不能の一幕もあった。結局この試合も十七対十七の引分けに終った。

二試合を通して感じたことは個々の選手がボールに対する異常なまでの執着心を持ち、何としても勝つという根性を持っていた。私達は、日本で二位のチームではあるが絶対に負けることは許されないと考えて戦ったが、結果は二戦二引分けに終り、私達の力不足と精神力の甘さを深く痛感した。

六日間の韓国遠征は、私達に日本では学ぶことのできない多くのことを学ばせてくれた。この貴重な体験を生かして、これからあらゆる面に、努力し生かしていきたいと思います。（FP、ヤング全日本メンバー）

目立った李京姫のプレー

□……女子は今回で2度目の交流韓国球界は、男子よりも女子に〝打倒日本〟の可能性を見出していると伝えられており、対戦成績に注目が集ったが、前回同よう1勝1敗と互角。（注・小松市女はこれで2勝1敗）、

目立ったのは、すでにナショナルチームの一員となっている李京姫（忠州女商、164cm）で、技、パワーともみごとなものがあった。

しかし、このほかの選手は日本のレベルと比べて、特に秀れている印象はなかったようだ。

□……男子はなんと2試合とも引き分け。これで日本勢は、47年8月の中大付（東京）16—11清涼工（ソウル）戦以来、勝ち星をあげていないことになる。

相変らず韓国側の〝事前調査〟はゆきとどいており「優勝した清水（千葉）は何故来られなかったのか」「泉選手は、大学に進むと同時にナショナルの一員になるのか」などと滞同役員に質問がとんだ。

▽男子第1戦（8月22日16時30分ソウル・永東高体育館）

岩国工（日本）13（10—8、3—5）13 朝鮮大付（韓国）
引き分け

	【朝鮮大付】	得	【岩国】	得
GK	朴現鍾	0	中元	0
GK	張正頏	0	大野	0
FP	李紀明	0	上村	1
FP	金乙洙	3	植木	2
FP	尹鍾沢	8	泉	6
FP	李大永	1	藤山	0
FP	朴範圭	0	坂本	3
FP	李性烈	1	山下	1
FP	姜俊鎬	0	中村	0
FP	陳祥泰	0	藤本	0
FP	李昌福	0	山本	0
FP	成永俊	0	村貢	0
	13（2）PT		13（3）PT	

▽男子第2戦（8月24日16時15分ソウル・永東高体育館）

岩国工（日本）17（10—7、7—10）17 東星（韓国）
引き分け

	【東星】	得	【岩国】	得
GK	張錫一	0	中元	0
GK	朴相権	0	大野	0
FP	李康皓	6	山下	2
FP	李吉原	6	坂本	5
FP	高昌徳	0	藤山	2
FP	金武康	0	泉	4
FP	魏栄万	2	植木	3
FP	李　淵	1	上村	1
FP	金得模	1	中村	0
FP	崔炳錫	1	藤本	0
FP	朴蓮貴	0	村重	0
FP	南辛鉞	0	山木	0
	17（5）PT		17（3）PT	

▽女子第1戦（8月12日15時、ソウル・永東高体育館）

小松市女（日本）12（7—6、5—2）8 聖貞女（韓国）

	【聖貞】	得	【小松】	得
GK	朴婷媼	0	酒谷	0
GK	孫美子	0	西川	0
FP	李福姫	1	庄田	0
FP	盧千順	2	中山	3
FP	李南子	2	本田	2
FP	徐今淑	0	千歩	4
FP	朴玉景	2	木戸	2
FP	金鍾淑	1	小野森	1
FP	金栄玫	0	西出	0
FP	金昌玉	0	田中	0
FP	崔源淑	0	山下	0
FP	崔海梨	0	八木	0
	8（8）PT		12（0）PT	

小松市女、初の1敗

▽女子第2戦（8月24日15時、ソウル・永東高体育館）

忠州女商（韓国）11（5—7、6—2）9 小松市女

	【忠州】	得	【小松】	得
GK	朴栄淑	0	酒谷	0
GK	李玲子	0	西川	0
FP	劉善鎬	0	庄田	1
FP	洙京順	0	千歩	2
FP	李京姫	6	八木	0
FP	斐順福	0	小野森	3
FP	洪承玉	2	木戸	1
FP	禹相順	0	中山	2
FP	李明淑	3	本田	0
FP			西出	0
FP			田中	0
FP			山下	0
	11（1）PT		9（1）PT	

来年で終会か　日本体協は、かねてから「日韓高校スポーツ交歓競技会」について検討を加えていたが、特定2カ国間の交流は、初期の目標を達成したとの意見が支配的となり、来年度、日本での開催を一区切りにするよう、なお研究することとなった。終会した場合は、かつてのように競技ごとの〝単独交流〟と代ろう。

日韓女子社会人延期か　全日本実連は、今年度国内で開催を予定していた第5回日韓女子社会人交流を延期したい旨、韓国協会と話しあうことに決めた。

世界女子選手権やオリンピックなどの関連で、日程の調整が難しいため。

全国高専選手権

大阪府立高専に栄冠輝やく

昨年初の歩みを印した全国高専選手権の第2回大会が8月28、29日の両日、愛知県豊田市の豊田市体育館（28日は豊田高専体育館も併用）に、全国から16校が参加して行われた。

各校とも成長のあとを示し内容を高めたが、決勝は大阪府立高専×一関高専（福島）の顔合せとなり、激戦の末、大阪の宿願が成り初優勝、連勝を狙っていた宇部（山口）は3位。

鹿児島、明石を振り切る

▽1回戦

宇部高専（前年優勝・山口）17（7－2、10－3）5 東京高専（関東・東京）

高知高専（四国・高知）21（10－9、11－10）19 富山高専（北信越・富山）

一関高専（東北・福島）18（10－8、8－7）15 鳥羽商船高専（東海・三重）

鹿児島高専（九州・鹿児島）12（6－4、6－7）11 明石高専（近畿・兵庫）

呉高専（中国・広島）18（9－6、9－6）12 育英高専（関東・東京）

豊田高専（開催地・愛知）21（8－6、13－6）12 釧路高専（北海道）

沼津高専（東海・静岡）9（5－3、4－4）7 北九州高専（九州・福岡）

大阪府立高専（近畿・大阪）15（7－5、8－7）12 長岡高専（北信越・新潟）

○……激戦が4試合あった。なかでも鹿児島×明石は見応えがあった。後手にまわっていた明石は20分初めて4－3と先行したが、鹿児島はすぐに3点連取、主導権を握り、そのまま後半10分には10－6と開いた。

しかし、明石もよく粘り小高、板野らで19分10－11と追いあげ予断を許さなかったが、鹿児島は22分石原が、貴重なゴールをあげ余裕を保った。

一関×鳥羽も目まぐるしく得点をいれあいもつれたが、前半なかばで優位に立った一関が、巧みに鳥羽をおさえこんだ。

沼津×北九州は、ともに決め手を欠きながらもみ合い、序盤で4点差をつけた沼津が逃げこんだ。

大阪×長岡は長岡が後半10分7－11から一気に点差を詰めて盛りあげたが、大阪はすぐに加点、振り切った。

豊田、呉に逆転勝ち

▽準々決勝

宇部高専 29（18－3、11－6）9 高知高専

自信に満ちた宇部攻撃陣は、前半15分早くも11－1と大量差をつけ、一方的に高知を押しこんだ。

豊田高専 17（7－8、10－6）14 呉高専

先行をつづけた呉が後半15分14－12とした時は、主導権を握り切るかとみえたが、そのあと得点が止まり、豊田は16分同点のあと、20分すぎ3点をたたみかけて鮮やかな逆転勝ち。

大阪府立高専 25（14－6、11－11）17 沼津高専

両チームとも守りが甘く乱打戦わずかに大阪が前半なかばからの連続得点にモノを云わせて勝った沼津も最後までよく粘り、内容としては接戦といえた。

一関高専 19（8－7、11－0）7 鹿児島高専

鹿児島は前半残り2分まで7－6とリードしながら、そのあと2本のPTを決められて7－8、これですっかりリズムを狂わし、後半はついに無得点、激しい前半とはうってかわって一関の一方的な展開で終ってしまった。

宇部、連勝の望み失う

▽準決勝

一関高専 12（4－3、8－4）7 宇部高専

	【宇部】	得
GK	白井	0
GK	西嶋	0
FP	荒川	3
FP	高杉	1
FP	東広	0
FP	告屋	0
FP	三戸	0
FP	神杉	0
FP	戒崎	1
FP	山根	0
FP	宮田	0
FP	林	2

	【一関】	得
GK	横手	0
GK	泉	0
FP	菊池	3
FP	木村	1
FP	村上	0
FP	井上	3
FP	伊東	0
FP	吉田	2
FP	菅野	0
FP	千田	0
FP	小野寺	3
FP	北田	0

（審・永田、竹野）

12（0） TP （1）7

○……前半の点差は予断を許さず後半に興味がもたれたが、宇部は凡失が多く、一関の速い出足にゴールを奪われ15分10－5と、意外の大差がついた。

ともに守りが荒く、粗雑なプレーが多いのは反省して欲しい。

大阪府立高専 13（6－9、7－3）12 豊田高専

	【豊山】	得
GK	成田	0
GK	児玉	0
FP	丹羽	3
FP	羽室	4
FP	河合	0
FP	加藤	0
FP	市川	1
FP	前田	0
FP	宮下	3
FP	仲村	1
FP	野村	0
FP	岡田	0

	【大阪】	得
GK	日野田	0
GK	渡辺	0
FP	清原	1
FP	〆渡	3
FP	中尾	1
FP	小田	2
FP	仲井	2
FP	尾野	4
FP	利川	0
FP	小川	0
FP	松林	0

（審・有岡、金沢）

13（0） PT （0）12

○……前半、豊田は巧みなショートパスプレーで好機を活かしポイントをあげたが、後半はその展開を読まれて、パスカットから大阪の速攻を許し20分10－11と逆転された。残り1分豊田は12－12としたが、大阪は終了間際のFTを中尾が鮮やかに決めて、見事な幕切れとした。

一関、激しい反撃も空し

▽決勝

大阪府立高専 20（12－9、8－9）18 一関高専

	【一関】	得
GK	横手	0
GK	泉	0
FP	菊池	2
FP	木村	2
FP	村上	0
FP	井上	1
FP	伊東	0
FP	吉田	3
FP	菅野	6
FP	千田	0
FP	小野寺	4
FP	北田	0

	【大阪】	得
GK	日野田	0
GK	渡辺	0
FP	仲井	4
FP	小田	2
FP	中尾	1
FP	尾野	4
FP	〆渡	5
FP	清原	4
FP	利川	0
FP	小川	0
FP	松林	0

（審・本多、松井）

20（2） PT （4）18

○……後半15分すぎから一関の見せた激しい反撃で、決勝らしい白熱した好内容になった。

大阪は前半なかばで得たリードを手固く守り、後半13分17－13と順調だったのだが、一関はそのあと2本のPTと吉田の活躍で、ついに17－17と追いついた。

○……こうなると戦況は互角。大阪が21分PTで18－17とすれば、50秒後一関も返し、延長かと見えたが、大阪は残り2分、最後の力をふりしぼって小田、尾野がゴールをあげ、粘る一関を突き放した。

高専大会参加望む 関係者は、今大会中の話し合いで横の連絡を密にするための機関設置と昨年来、日本協会がつづけている「全国高専体育大会」への参加を引きつづき、強く要請することを申し合せた。

全日本高校選手権（塩山市）総評

嶋田新太郎

整備された塩山中学校を堂々の行進、多彩なユニホーム、部旗を先頭にカラフルな中にも各地で激しい予選を勝ち抜いて来た明るい表情のパレードであった。翌日から6コートで熱戦が展開され大会3日目までに1点差の試合16、延長戦9試合、うち抽せん2試合と全く互角の戦いが演じられた。

男子では昨年初年出場初優勝に輝やいた久留米工（福岡）の試合ぶりが一つの焦点。

2回戦で難敵とみられた氷見（富山）をシーソーゲームの末降しホッとする間もなく迎えた熊本市商（熊本）戦も、前半の不利を、後半にはね返し、地元・日川商（山梨）の健斗をも振り切ってベストフォアへ勝ちあがった。

一方、優勝候補の呼び声が高かった岩国工（山口）も大差の勝負をつづけて準決勝へ進出した。また新星拓大一も東京都の激戦地で鍛えられただけあって、緒戦から豪快な勝ちっぷりを発揮、3回戦でこれもやはり激戦地愛知を勝ち抜いてきた名古屋市工と激突、大型同志の白熱した試合を演じて破りなお余勢をかって大分東をも降す快進撃だった。昨年準優勝の小倉西（福岡）はダークホース清水（千葉）に敗れ、勢いづいた清水は此花学院（大阪）も食い、がぜん注目を集めるところとなった。

此花戦は、後半相手ミスに乗じて速攻を連続させての勝利で、さらに調子をあげる要因とした。

特筆される麻生、清水商

さて、女子は、前年優勝の大谷（大阪）、前々年優勝の小松市女（石川）が奇しくも2回戦で激突、両チーム必死の攻防の末、小松市女のラッキーな一投が決勝点となって大谷の連覇の夢は消え、これで一気に以後の山陽女（広島）市邨学園（愛知）に楽勝する下地を造った。徳山（山口）、涌谷（宮城）、熊本市立（熊本）など強豪の中にあって小じんまりとまとまった麻生（茨城）が2回戦精華女（京都）を破ってから一戦一戦調子をあげ熊本市立に逆転勝ちしたのをはじめ無欲の勝利で準決勝まで進んだのも特筆してよい。また、清水市商（静岡）が明倫（神奈川）に苦戦してから、むしろ固さがほぐれて東北の雄、秋田和洋女（秋田）を2年生・植田の活躍で破り、準決勝に駒を進めたのも光る。

和洋女は、栃木女（栃木）と抽せん勝負という際どさだったが、その幸運を活かせなかった。

大分東（大分）は、強敵とみられた添上（奈良）、暁（三重）、小諸商（長野）をなぎ倒し、3回戦で有力候補、新居浜市商（愛媛）を破った国分実業（鹿児島）と熱のこもった一戦をみせ、逆転で大分東が4強の座を仕止めた。

ベストフォアの激突する第5日すでに男女98校のうち90校が姿を消し、2面に〝濃縮〟されたコートで明日の決勝進出をかけ、重苦しいなかにも、熱気が周囲にみなぎっていた。

男子、久留米工―岩国工。久留米には長野、岩国には泉（ヤング全日本）と長身のエースアタッカーが居り、両者の攻撃の応酬がみどころだった。

一進一退から岩国工が前半巧妙にリードを奪って10―6、久留米工の追いあげをかわして待望の決勝進出となった。無欲ともいえる戦いぶりで勝利をものにしてきた清水―拓大一はおとなり同士、手のうちは充分知っているだけに、もてる力をぶつけあい激しい攻防戦を展開したが清水のGK板橋の好守備とチームのまとまりが勝利を呼び拓大一は惜しくも退いた。

女子では優勝を意識している小松市女が完璧な試合ぶりで麻生を破った。麻生は後半猛攻したが前半の失点が大きく、小松市女に名を成さしめた。大分東と清水市商は大分東がよく走り清水市商を寄せつけず振り切った。



女子決勝，小松市女（攻）対大分東は今大会を象ちょうする激しい気力のぶつかりあいだった。　（撮影・山田真市）

作戦狂わした豪雨

5日目まで全く雨を知らずの大会であったが6日目にして厚い雲におおわれ、雨がいつ落ちるか判らない天候となった。しかし女子決勝・小松市―大分の一戦からいよいよ今年のフィナーレが幕をあけた。両軍さすがに意識してか動きに積極性さを欠き、重圧に押しつぶされそうな試合となり、10分ほどは慎重な攻防のくり返しに終った。大分東の菅本のロングシュートが決まってからすぐに小松市女も千歩でお返し、ようやくリラックスしその後小松はフリースローから加点、3対1とリード。後半心配されていた雨がついに降り出し混んこ試合を演じたが、前半の2点が大分はどうしても縮まらず5―3で小松市女が2度目の優勝を果たした。

男子決勝は、激しさをますと予報された雨天とあって、協議の結

果、開始を15分繰りあげ、一部の時間は女子決勝と併行する異例の運営になった。

足場はぬかるむ一方となり、前半岩国工は、大砲・泉に頼りすぎ動きが思うようにいかない。

対する清水は巧者山口のリードでよく動き、仲田、小松の巧技もあって4―1。

後半、岩国工はどうにかプレーが滑らかになってきたものの、清水のGK板橋の好守にシュートが決まらず、前半の失点を挽回できずに時間が経過した。

清水のみせた「3人パス」による攻めは、雨中戦の大原則であるだけに、若い岩国工の速攻と対照的で、ベンチワークの狂いを生む雨の運不運ともいえた。

優勝の清水は、4回目の出場での栄冠。立派である。

関東2位の実績から一応マークはされていたものの、一戦々々着実な伸びを見せての戦いには目を見はらされた。

特にGK板橋のプレーは完ぺきに近く、大きな勝因である。

こうして、激斗のインターハイ塩山大会は、雨の中で幕を閉じた

無事に全日程を終了したことは塩山市実行委員会のかたがたのなみなみならぬ御努力と、市役所の皆さんのおかげで、このほか裏方として黙々と与えられた仕事を処理して下さった地元高校各校の部員・生徒の皆さんにお礼を申し上げたい。また、ママさんがバレーの皆さんの接待や、地域の土建業の皆さんが毎日の選手の輸送に当っていただいたことなど本当に頭の下る思いであった。塩山市の隣り三富村では選手の大半の宿命を引き受けていただき、村をあげての歓待にも深く敬意を表したい。

このよう地元といわず地域といわず挙げてこの大会に尽力を戴いたことは実行委員長・笹本保雄塩山市長の御好意と御配慮によるものであり、併せて山梨県、及び県はハンドボール協会の皆さんに対しても感謝申し上げて総評といたします。(日本協会常務理事、全国高体連ハンドボール部副部長)

全国教員養成大学研修会報告

記録・山田哲雄、大塚文雄、東一敏

文部省後援による今年の全国教員養成大学研修会は、7月21日から24日までの4日間(3泊)、東京・青少年総合センター及び東京教育大の施設を利用して講演・実技研修を行った。

参加者は男子7校50名、初実施の女子が5校35名の合わせて85名で、会期を早めたことから、前回(141名)より下廻ったのは、次回以降の課題といえよう。

【第1日・7月21日】午前9時30分から開講式、引きつづき文部省体育局主任体育官・早川芳太郎氏の講演「学校体育と社会体育について」が行われ学校体育に限らず教育とは教えこむものではなく、本人の持っている〝いいもの〟を抽き出すことであり、体育の場合は運動をさせるのであり、テクニックの指導ではない、と話された

このあとさらに、前回好評を得た神田順治氏(元東大教授、スポーツ評論家)の講演が、今回は「やる気について」のテーマで行われた。

午後からは、東京教大のグランド、体育館(5面)で、グループ別指導によって「基本・応用技術」の実習にすすみ、この日は攻撃基礎技術が行われた。

【第2日・22日】午前8時から「授業におけるハンドボール指導の問題点」というテーマで、日本協会普及指導部長・勝繁夫氏(立教大教授)が講義を行い、つづいて9時からは「審判法について」IHF公認審判員・佐野和夫氏が講議した。

また、大塚文雄審判部委員が「審判実施上の注意点」として、正確、自信、勇気、タイミングが強調された。

このあと午前中は「体力づくりトレーニング(実技)」が日本協会技術部長・渡辺慶寿氏、同普及指導部委員・大西武三氏によって男女に分かれて指導された。

この日は特に楽しみながら体力づくりをする各種トレーニングが主題となった。

午後からは、前日に引きつづき「基本・応用技術」の実習が行われ、防御基礎技術の指導が念入りに繰り返された。

【第3日・23日】8時30分から渡辺慶寿氏の講義「ハンドボール選手管理について」、大西武三氏の講議「体育教師としてハンドボールを通して自己鍛練を」がつづきこのあと大西氏司会による「元ナショナルプレイヤーの理論と意見」が近森克彦、氷海正行(ともにミュンヘンオリンピック代表)平岡秀雄(44年欧州遠征メンバー)の3選手を招いて行われた。

近森氏は「体力養成がすべて。なかでも走ることが基本だ」、平岡氏は「練習量を増やし基本を養い、そのあとで個性ある技術を身につける」、氷海氏は「体力は技術より正確にスピーディに発揮させる。練習のための練習にならぬよう、実践的なトレーニングをつむ」など説得力に富んだ発言をし受講者たちの耳を傾けさせた。

さらに、参校各校の代表者がチームの現状と将来の抱負についてスピーチした。10時からは前日につづく「体力づくりトレーニング(実技)」。

午後は「試合及び審判実習」として男子9、女子6試合が行われ受講生は時間配分による審判実習のほか記録、得点掲示、計時員などについても実地訓れんが施された。

また、交歓の意味を含めて男子1、2位チームと役員(前記3選手を含む)チームのエキシビジョンマッチ2試合も行われた。

【第4日・24日】8時30分から、大西氏司会による「全体ミーティング」が行われ、熊本大による寮歌の披露などもあって和やかなムードで。9時30分閉講式を迎え、勝氏から大学別に修了証が授与されて、全日程をつつがなく終えた。

なお参加校は男子が愛知教大、三重大、大阪教大、熊本大、広島大、自治医科大、筑波大、女子が滋賀大、大阪教大、愛知教大、奈良教大、筑波大。

参加者を学年別にみると男子が4年2名、3年5名、2年12名、1年28名、不明3名、女子が3年6名、2年16名、1年13名だった

全国教員養成大学研修会に参加して（受講生感想）

研修会開会当初、全員が集合した機会に、簡単な自己紹介なり、せめて各校の紹介と代表者が簡単な挨拶するなりすれば、ぐっと雰囲気が和らぎ、3日間ではあるが仲間意識もはぐくまれ、すべてがスムーズに運んだであろうと考える。

講義・実習の中でもっとも感銘を受けたのは氷海正行先生の「防御における理論」であった。

これまで数年間ハンドボールを行ってきて、全く気がつかなかった技術を少なくとも、頭の中では出来たことを嬉しく思う。

また、最終ゲームで元ナショナルプレイヤーで固めたチームと戦わせていただいたのも感激。強豪相手に胸をかりるつもりの一戦で歯がたたなかったものの、これまでもやもやしていた気分がふっ切れた。

昨年の参加者から宿舎での食事を〝心配〟していたが、思ったよりずっとおいしく食べられた。

第3回以降いっそうの充実を祈ります。（本田一修・熊本大）

去年につづいての参加。今回は時期的な関係もあって参加者が少なかったにもかかわらず、内容は去年より数段新鮮味が感じられた。

我々からみるナショナルチームと云うと「はるかかなたの存在」でしたが今回、近森、平岡、東、氷海さんなどと身近に接触でき、いろいろと指導してもらえたことは何よりの収穫であったと思います。

去年は、全日本ー東ドイツの国際試合を見学できたのですが、今年は、こうした企画とぶつからずいささか残念でした。

しかし、天候にも恵れ、楽しく過せたことはなによりで、広島へ帰っても、日本協会の役員がた、ナショナルプレイヤーとの触れあいがはげみになるかと思うと、嬉しい気がし、それも何か言葉で充分表現できないような気分です。

神田順治氏が今年も我々のために「やる気について」とテーマで楽しいなかにも、自分自身痛感させられるお話を聞かしていただいたのもよい思い出です。

来年は小生は最上級生となり参加するだけの時間がなさそうですが、是非、後輩を来させたいと考えています。（石村良雄・広島大）

もっと実地の練習をしたかった説明だけに終ってしまったためにただ頭の中で「ああだ、こうだ」と理解しただけ。もう少し期間が長く、1グループの人数が少なければ、もっともっと充実したすばらしい研修になっただろうと思う

ナショナルチームのかたに教えていただけたのはよかった。みなさん素晴しいかたばかりで、自分とは〝別世界〟のプレイヤーのようでした。でも、身近な所で教えていただいて、すごく感激。

今まで知らなかった技術、戦術理論もあったし、面白い練習方法も判ったので、これからの練習に活かしていきたい。

いつも私たちは小人数の練習で〈ハクリョクがない〉のに、今回は大勢の上手な人と練習できたのも、本当によかった。

最後に他の学校の人たちと、もっともっと親しくなりたかった。一部の人としか話が出来なかったのが残念。全員集まった時、なにか楽しい企画でも考えていただければよいと思う。（坂本洋子・奈良教育大）

僕はまだハンドボールをやりだして1ケ月足らず。まったくの初心者です。自分がハンドボールに対する予備知識さえほとんどなく参加したことを悔やんでいます。

それだけに、本当にこの研修は価値あるものだったと、下手ながらも、はっきり感じとれました。

日本でも超一流のプレイヤーや指導者による講義、実技、アドバイスが、ハンドボールをほんの少ししかかじったことのない者には夢のようでもあり、心の重圧でもありました。

研修の進めかたは、僕の理想の一つにはまったもので、子供たちへ運動・体育を理解させ、興味を抱かせる方法を教えていただけたのは、体育を専攻する僕にとって極めて有意義でした。

自分の体力の軟弱さを、ある程度、自己流に悟っている僕は、ハンドボールの達人とかスペシャリストになれるとは思っていず、それを他力的に実現させられる初歩的な指導者になれたらと考えていましたが、この研修は、その可能性に自信のようなものを感じとることにもなりました。

しかし、これからは自らの体力をつけハンドボール技術も、積極的にとり入れるように心がけたいとも思っていますし、ハンドボールの審判法なども多少の理解ができ嬉しく思っています。楽しく、ためになる研修でした。（戸田佳宏・愛知教大）

勝繁夫・日本協会普及指導部長の話 2回の開催で、この研修会に何が求められているかが判ってきた。

いっそうの充実と新鮮な内容を企っていきたい。

開催時期については、会場、宿舎の問題もあるが、いちばん集まりよい時日を研究するつもりだ。

◆おことわり　各氏の感想文は誌面の都合で一部短かくしました。

早川文部省主任体育官　学校体育と社会体育　～講演要旨～

学校体育に限らず、教育とは教えこむものではなく、本人の持っている〝いいもの〟を抽き出すことであり、体育の場合は運動をさせるのであり、テクニックの指導ではない。

学校体育の優劣は、単に優勝カップがいくつあるかではなく、その学校の生徒たちがどのように運動をし、どのように楽しんでいるかである。

一方、社会体育は、近年地域体育として婦人会や少年団スポーツなどが普及してきており、今後ますます隆盛となろう。それらのスポーツ活動（例えばスポーツ教室）を指導して欲しいと要請された時は、ぜひ協力してもらいたいと思う。

運動をしたい、丈夫になりたいと思っている婦人や子供たちに技術の指導ではなく、運動、スポーツの楽しさを教えて欲しい。その意味では、学校体育と〝基本理念〟は同じである。

◇問題かかえる五つの大会 〜その周辺を探る〜

財政危機という大難題をかかえながらも、5選の荒川体制は、着実な歩みを示しているが「事業の再点検」は重点施策の一つに変りない。

特に、各種競技会の洗いなおしは、ひんぱんな国際交流と相まって必至である。

当面する問題点五つをあげその周辺を探ってみた。

（編集委員会）

「日本リーグ」は発足するか

いく度となくささやかれ、噂された「日本リーグ」だが、去る6月の全日本実連による組織決定（＝本誌132号参照）ほど具体的なものは過去になかった。

それだけに、がぜん現実味をおびた話題として、内外の関心を集めているが、現段階ではあまり進展がない。

「地方愛好者にも好カードを」という日本協会の姿勢からすれば何をおいても、この実連提案へ乗り出さなければならないわけだがやはり当初予想されたように「日本実業団リーグ」を改称するだけという点に、もうひとつ煮え切らなさがあるようだ。

同リーグは、昨年から全日本実連の新構想として始められ、いわば全日本実業団決勝リーグの分散開催（各地サーキット）だが、これを改称するだけでは物足らないというムードが案外強い。

「日本リーグ」と云う名称は、国内最強チームが集った組織にこそふさわしいとする意識が高いからである。

学生チームのある若手コーチは「女子はともかく、男子は、今の8チームで日本リーグを組んでも〝説得力〟がない。時期尚早だ」とみている。

実連側もけっして、現在加盟の8チームが、「国内のベスト8、トップ8」だとは思っていない。

某有力チーム（男子）の監督は「今の顔ぶれでは、看板倒れしそうだ」と素直に不安をあらわす。

各チームが期待する「日本リーグ」にすればマスコミの関心もちがったものになる」も、当の報道関係者の反応が実のところ冷めたい。

こう話してくると、またもや「日本リーグ」は立ち消えムードの濃い印象を受けられるかもしれないが、今回はこれまでと違った〝発足への要因〟がある。

それは、日本協会事業として、新しく、しかも有力な財源（事業収入）に見立てられている点だ。

全日本実連の構想は、男女とも8チーム2回総当り合計112試合。

実連理事長の山田稔氏（大阪）は日本協会常務理事で、財務委員会の有力メンバー。「各試合3万円の開催権料をとれば338万円の収入」とはじいた。

これだけのマーケットがあるかという心配を別にして考えれば財源探しに躍起となっている日本協会にとって〝誘惑の数字〟。

7月の月例常務理事会で「前向きに検討」（本誌133号参照）としたのも、この背景が強い作用をしている。

ある実連理事は「台所が苦しくなると、企業やオーナーに泣きつくより、はるかに得策。

実力のほうは3年待ってもらえば、文句なしの〝日本リーグ〟に成長させる」と云う。

どうやらこの言葉が、これから先を支配しそうだが、小委員会の日本協会側メンバーがいっこうに発表されないことや、普及指導部筋で「日本リーグが発足したら、その参加チームは国体辞退を…」と云った意見が出されているという〝情報〟も流れて、各チームと関係地方協会に動揺が起きているとも伝えられている。

地域によっては来年度の体育館使用申しこみが迫っているなどもあり、遅くとも11月上旬には、なんらかの結論が出されるだろう。

〝濃縮〟を検討中の「全日本総合」

昭和24年度に始まった全日本総合選手権大会は、ナショナルチャンピオンチームを決める国内最頂点の大会として、誰もその存在に異論はない。

しかし、大会内容——特に参加チームについては、たえず議論がわいている。

第1回（昭24）から第13回（昭36）までのフリー参加、第14回（昭37）から第22回（昭45）までの地区予選及び加盟団体推せん制を経て、現行のシステムが採用されたのは第23回（昭46）大会。

この時から、会期を12月に移し当分の間「東京定着」が打ち出された。

当時、20〜32チーム（男子）が

参加していたものを、一気に半数（男16、女12）へしぼったのはタイトルの権威を高める勇断とされたのだが、昨年あたりからこの方法でも、まだ不充分とする声がおきはじめた。

あまりにも、参加資格母体が総花的のため、予選ラウンドが白熱せず、妙味に乏しいのである。

この4年間1回戦の総試合数は男32、女24だが、このうち20点差以上の試合が4（男4）、15点差以上の試合が10（男5、女5）、10点差以上の試合が9（男7、女2）ある。

約三分の一が「味気ない内容」なわけだ。

ファンも正直で、1・2回戦はまったく出足がわるく、ただでさえ底冷えの会場を、いっそう寒々とさせているし「観客動員数を紙面編成の一つのバロメーター」とする報道関係者も、だんだん尻ごみしはじめている。

西ドイツ決勝の一万二千という大観衆は別格としても、ナショナルチャンピオンを決める大会にしてはあまりにも淋しい。

そこで、3部合同会議が中心となって、検討をはじめ、いちじは今冬の第27回大会から新構想への切り替えを伝えられたほどだった

同会議が手がけているのは、

①参加チームの濃縮

②その出場方法（推せん母体）

③本大会の競技形式

の3点と云われる。

①については、8チーム説さえあるようだが、一応男子12、女子10程度におさまるとのみかたが強い。

そうなれば③は、男子は4チーム3組の予選リーグのあと、ベストスリーで決勝リーグ、女子は5チーム2組の予選リーグのあと、各組同位者で順位決定戦に落ちつくだろう。

問題は②だ。ある会議メンバーは「内容充実のためには社会人（クラブ）、高校（特に男子）、自衛隊代表のカットが必要」と云っている。

過去4年、これらの代表が善戦した例もあるが、やはり実業団、学生との間には一線が画されており、「無理して参加させる必要はない」と云う意見が多いようだ。

しかし、簡単に除外はできまい特に、社会人（クラブ）は、この大会出場を目標に精進しているチームも多く「弱いから切る、では納得できない」（三春台ク〜神奈川〜関係者）と、反撥の構えだ。

また、高校女子の関係者は「内容を第一とするなら学生2、高校1は逆のハズ」とハナ息が荒い。

そこで考えられるのは、地域予選制の再採用である。

3部合同会議でも「9ブロック各代表1、実連、学連各1、前年優勝1で合計12」が有力案の一つになっているようだ。

各ブロック予選は、当然、各県代表によって争われ各段階で、あらゆる分野のチームがいり乱れる試合数も増加するから4月頃県予選開始と云うケースも生じよう

荒川理事長は「県総合→ブロック総合→全日本総合と積み上げられないものか」と云っており、そうなれば、年末のファイナルは、文字通り最高峰となる。

現行の資格づけも、強豪を集めるという点では、一つの方法だがせっかくチームを持っていてもタテ割りが過ぎてシーズン始めからまるきりこの大会を目指すことのできない、といった閉鎖的な面がある。

その年度日本協会登録した全チームに、本大会出場の道が空けられていなければ、ナショナルチャンピオンとして君臨するチームを選ぶ大会とは云えないだろう。

3部合同会議の答申に注目したい。

「全国クラブ大会」の開催機運

いぜん根強く、というより、荒川理事長が、「日本ハンドボール界の魂（たましい）」とさえいうクラブチームの活動は、たしかに、実力だけで判断してはいけないものを持っている。

日本協会登録されているいわゆるクラブは男子が約270、女子が約50（昭和50年度）。

全国で千五百あるという高校、135校の活動が伝えられる学生界各チームの40％にOB（OG）クラブが備えられているとすれば、まだまだ同好の士の登録数は増えてよいわけだが、それはともかく、この320クラブの行く道について、日本協会は、真けんに考えなければならないだろう。

5年前、日本協会は各ブロックに対して、ブロックレベルのクラブ選手権（大会）を開設するよう要望し、大会発足と同時に日本協会杯（持ち回り）を贈る策を示した。

これに呼応して、45年度に東海近畿がスタート、46年度に北海道関東、九州（女子のみ）、47年度に四国が大会を開き、軌道へのっている。

興味深いのは早々とクラブ大会を始めたのが、北海道を除いてはいずれも実業団の強豪がいて、なかなかクラブに活躍の場のない地域な点である。

未発足の東北、北信越はいぜんクラブが一般球界の主流、中国は一般選手権の伝統が強くしかもクラブ—実業団は五角の戦況を保っている。

つまり、クラブは、所を与えれば、充分にそれに応える活動を行うということであろう。

そうした傾向を受けとめて、荒川理事長は、第二の段階として「全国クラブ大会」の新設を考えはじめ総務、企画両部に調査を依頼している。

これまで、日本協会内には、クラブの全国大会は不要、という考えかたが強かった。

クラブのメンバー構成は、あらゆる層にわたり、いかに全国大会とは云っても、勤めさきを休んでまで出場することは難しいだろうとか、平生の練習量が充分でなくはたして安全な試合運行がつづくだろうか、と云った自己規制的ムードだったのである。

ところが、ブロッククラブ大会の活況や、全日本総合選手権の社会人代表の健闘、さらには週休2日制の浸透、交通事情の好転など内外情勢が、考えかたを改めさせはじめたのである。

安全についても「全国大会に出るとなれば充分トレーニングを積む」と関係者は云う。

現段階でもブロッククラブの1位を集めたチャンピオン大会ならすぐに決行できる状態と見るムキもあるが、嶋山総務担当常務理事は「三重国体の時にでも、クラブ関係者とじっくり話し合ってみた

い」としており、今のところ具体的な作業は進んでいない。

ここで、問題となるのはクラブとは何か、だろう。

日本協会は、48年4月に『クラブの基準（9規定）』を公けにしたが、この基準で締め出している大阪イーグルス、埼玉フェニックス、スワロー兵庫など教員チームは、クラブの典型という声もある。

また、各地で産ぶ声をあげているクラブリーグや、社会人リーグで必ず問題となるのは〈選手資格〉だ、という事実もある。

このテーマは、いざ大会を始めるとなれば、研究して解決できるわけで、日本協会が、クラブ大会の旗上げを行うのは、時間の問題とみる消息筋もおり、どのタイミングをとらえるか興味深い。

◇

こうしてみると「日本リーグ」―「全日本総合」―「クラブ大会」は一つの〝点〟に結びつけることのできる課題だ。

今のところは、別々にメスが入れられている感じだが、近いうちに、三つを照合して、長期的な展望に立った事業構想を明きらかにする必要があるのではなかろうか

参加数でもめる「全国中学生大会」

全国中学生大会の歴史もすでに4年だが、本大会出場チーム数の増加は第1回大会の時からの〝宿題〟であった。

日本協会が男女とも「10チーム（9ブロックと開催地）」にこだわっているのは、共催の全国中体連が、規模の広がりをさけるよう強い要望を各競技団体に出しているのと、財政的な問題でである。

前者は「多くても16校。ブロック代表制を最低単位に」というのが、全国中体連の意向で、つい先日―9月8日にも、要望書が送られてきている。

ハンドボールの場合は「10チーム、2日間」と、まさに優等生の大会規模だが、現場関係者は、ブロックを均一にみるのではなく、所属県数によって代表2校のところが欲しいと切望する。

16校までは許されている、と解釈すれば、10校の線を何がなんでも守ろうとする必要はないわけだが、ここで〝お家の事情〟がからんでくる。

今年の第4回大会（8月17～18日、石川県小松市）を例にとると日本協会は、1校16名の宿泊費補助として2泊分二千円を支払っている（ただし第1日1回戦敗退チームは1泊分千円）。

仮に、これを男女各16校とすると、大会は最終日連戦でも3日間が必要となり、今年より約40万円の負担増となる。

今年度の全国中学生大会事業費は70万円、拡大の場合は100万円を越すわけで、窮迫の協会財政では苦しいというのが実情だ。

来年の第5回大会の開催を打診されている大阪・堺市協会は「引きうける場合は男女各16校、日本協会負担100万円」という申し入れを勝・普及指導担当常務理事を通じてしたと伝えられており、中学球界では、この姿勢を当然のことながらバックアップしている。

「日本協会が、将来の財産として中学球界をみるなら、リミットいっぱいの16校に増大させるべきだ。そうなれば、チームも増える」と全国大会出場に希望が出て、ある中学校コーチは云う。

しかし、荒川理事長は「将来はともかく、当分の間、財政事情もあるし現行のまま」と、現状維持を明言しており、財政の見通しがつけば増大を認めるか、との本誌の質問に対しても「男女各10校で充分と考える」と答えており、この平行線は、なかなか交わりそうもない。

来年2月の最終決定時（全国代議員会、同理事会）までもつれこむことはさけられまい。

「国際交流」積極姿勢だが……

昭和29年に始められた「NHK杯」（当初は「全日本総合室内選手権」）が、今年度はついに休止された（〈11本誌既報）

昨年度から、NHKの申し入れで、国際試合に衣替えされ、今年はある世界上位チームと交渉していたがまとまらず、ブランクとなったもの。

今春2月、チェコの強豪「スコダ・ピルゼン」が、来日直前になって、相手側の事情で遠征とりやめを通知してきたなど、国際交流は問題がつきまとう。

しかし、ファンや関係者の国際親善試合を望む声は強く、恒例化した「新シーズン開幕シリーズ」もこの頃は、すぐに受け入れ地が決まるし、今後の引き合いもすでに寄せられているほどだ。

日本協会も、事業収入をあげるには、最善の方法であり、積極的な姿勢を示しているのだが、経費の分担、来日時期がからんで「思うようにまとまらない」（滝口企画担当常務理事）のが実情である。

日本協会は、外国（特に欧州）チームの招致基準として、

①世界選手権上位のナショナルチーム（男・女）

②各国選手権一部リーグの上位クラブ（男・女）

③優秀、有名選手が4名以上居るクラブ（男）

をあげているが、①は東欧勢全盛だけに、ハンドボール界だけでのルートでは、話が進まず、49年度ユーゴ女子が流れ、今年実現できなかったのも東欧圏の一国だ。

②は、一応いまのところ成果をあげているが、ヨーロッパのクラブは、選手の移動が激しく、話の始った時点で強くても、進めていくうちに力が落ちる例もある。理想としては、ヨーロッパ駐在理事を置き、ブッキングの窓口とすることだが、おいそれとは実現せず当分は文書のやりとりが総てだろう。

さて、今後の国際交流だが、東ドイツ交流が定期化し、来年は来日の番。5～6月に男女同時招待を試みてはどうかという意見がある。また、モントリオール優勝国招待も、首脳部の胸中にはあるようで、そうなれば楽しい。

女子の交流は、相変らず停滞気味、アジアへ足を延ばすとなると休暇がかさみOLの多い外国選手は、勤務先の都合がつかないといった事情も作用しているようだ。

本場ヨーロッパの技術をまのあたりにする機会が少いだけに「せめて年間3回の国際試合を」（読者・丹羽維一さん）という声は肯ける。日本協会の渉外手腕を期待したい。

男女とも西軍勝つ

～全日本学生選抜～

東軍女子反撃及ばず

第25回（女子第7回）全日本学生選抜東西対抗戦は、9月15日13時30分から名古屋の愛知県体育館で行われた。

男子は、ともに個人技中心の展開で大あじな試合となったが、後半なかば優位に立った西軍が2年ぶりに制勝、通算成績は東軍15勝、西軍10勝となった。

女子は、東軍の激しい追いこみで白熱したが、西軍が辛くも逃げ切り、第1回（昭44）以来、久々の勝利を飾った。

通算成績は東軍4勝、西軍2勝・1引分。

西軍の男女優勝は6年ぶり2度目（観衆、約二千）

★男子対抗戦は15時30分から開始
審判＝西川勧也、河野好央

西　軍 18（9−8 / 9−6）14 東　軍

後記　市川孝夫

○……最近3年間、対戦成績こそ1勝2敗だが、毎回せりあいを展開してきた西軍は、攻守ともに自信をもち、特に東軍の主柱・村田（法政）、蒲生（中大）、GK柴田（法政）がプレオリンピック参加のため欠場するとあって「是が非でも勝とう」とその志気は大いにあがっていた。

○……互いにさぐりあいのあと、堅さがとれたのは10分すぎ。東軍が山高—山田のスカイプレーをみせれば、西軍もすかさず中馬—能波が鮮やかにスカイプレーでお返しするなど、見応えのあるプレーの応酬で場内を沸かせた。

20分すぎから西軍ディフェンスに落ち着きがみえはじめ、なかなか攻撃の糸口をつかめなかったが西軍は20分、21分の連続ゴールで8—6とリード。

そのあとは、守りの強さというより、むしろ貧打戦で東軍が2、西軍が1とそれぞれPTでポイントをあげ前半を終えた。

○……後半、東軍は3分、菅野の豪快なシュートで9—9に追いつき予断を許さぬ戦況となったが、内容的には、互いに歯切れの悪いプレーをつづけ、緊迫感を生むまでには至らない。

10分すぎ、ようやく西軍は根木、高橋、能波の活躍で東軍守備網を崩し、丸井、矢辺が交互に得点、16分15—12とリードを奪った。

○……東軍も大熊、戸田、山田らで反撃を示したが、ポストプレー以外にこれといった決め手がなく、18、21分、菅野がPTを成功させ14—15としたものの、それ以外は、ミスで好機を逃し無得点。

西軍は20分すぎにたたみかけて26分18—14、勝利を不動とした。

○……高度な技術とスピードでスケールの大きい試合が期待されたのだが、両軍ともに強引な個人技が目立ち、単調な展開の繰り返しで、内容的には不満足な一戦だった。

また、次代の日本ハンドボール界を背負うスター不在の印象をいだかせたのも、淋しいことであった。

○………男　　子………○

得	【西　軍】		【東　軍】	得
0	藤井（大阪体大）	GK	田村（中央）	0
0	日比（京都産大）	GK	斉藤将（日体）	0
0	根本（大阪体大）	FP	大熊（日体）	2
4	矢辺（大阪体大）	FP	藤本（中央）	0
1	中馬（九州産大）	FP	戸田（中央）	2
0	青柳（九州産大）	FP	山田（早稲田）	2
3	山本（名城）	FP	山高（早稲田）	1
0	鈴木（名城）	FP	菅野（日体）	7
0	布垣（中京）	FP	関（中央）	0
1	大庭（同志社）	FP	勝地（慶応）	0
0	北川（大阪体大）	FP	西窪（中央）	0
5	丸井（大阪体大）	FP	金沢（中央）	0
3	能波（大阪体大）	FP	大平（北教旭川）	0
0	金谷（九州産大）	FP	佐野（金沢大）	0
1	高橋（名城）	FP	千葉（東北学院）	0
18	（3）	PT	（5）	14

○………女　　子………○

得	【西　軍】		【西　軍】	得
0	田村（武庫川女）	GK	長谷川（日体）	0
0	堀川（大阪体大）	GK	鍋田（東女体）	0
2	辻（武庫川女）	FP	藤山（日体）	3
1	浦崎（中京）	FP	小田（日体）	2
0	石川（中京）	FP	木元（日体）	0
0	金森（大阪体大）	FP	寺尾（日体）	0
0	平山（大阪体大）	FP	林（日体）	2
3	岩井（武庫川女）	FP	赤岸（東女体）	1
2	沢田（武庫川女）	FP	橋（東女体）	0
0	藤本（武庫川女）	FP	岩本（日体）	0
0	佐野（武庫川女）	FP	山田（東学大）	0
0	芦野（中京）	FP	安藤（東学大）	0
1	立川（中京女）	FP		
0	大竹（大阪体大）	FP		
0	三輪（武庫川女）	FP		
9	（2）	PT	（1）	8

西軍、着実に好機活かす

★女子対抗戦は14時から開始。審判＝岩永重之、小林清通

西　軍 9（6−2 / 3−6）8 東　軍

後記　若山　博

○……西軍は去年の引き分けで東軍に対する意識をかなり軽いものにしたようだ。

それが16分までの4点連取に実り、18分間相手に1点も許さぬ動きのよさにつながったと思う。

西軍4点のうち2点はPTで、沢田が巧く決めたのも大きい。

東軍は体調が整わず、再三のチャンスをつぶし、PTも射ち急いで西軍GK堀川にあっさり捕まるなどよいところがなかった。

○……後半も西軍が出足のよさをみせ3分までに辻が連続得点、6分立川で9—3と差を開いた。

ところが、これでパタリと攻撃が止まってしまい、東軍の藤山、小田、林らの激しい反撃にあい20分9—8まで詰められた。

さらに残り1分東軍はPTを得てベンチを総立ちとさせたが、ポイントオーバーで実らず、西軍は辛くも逃げ切った。

西軍は、前半巧みな組織攻撃で好機を着実に活かしたのが利いた。

久々に溜飲、西軍ベンチ

□……西軍関係者にとって史上2度目の男女優勝は、〃東高西低〃と云われる学生界だけに、久々に溜飲のさがる思いだったようだ。

11人制時代は東西互角、むしろ関学の活躍で西側がすべて主導権を握っていた時期もあるが、7人制になってからはどうもパッとしない。「なんとかしよう」というOB—現役の気力が、はっきり表われた今年の大会と云える。

東北学院、まず勝ち名乗り

秋の学生リーグ戦開幕

秋の学生リーグのトップを切って東北学生が8月29日から31日まで、岩手大体育館に10大学が参加し熱戦を繰りひろげた。

上位2校に、11月の全日本学生選手権(福岡)出場権が与えられるとあって、激しい試合がつづいたが、ベストスリーは、春季と同じ顔ぶれになり、東北学院がバランスのとれた攻守で2季連続の全勝優勝を飾った。

▽予選ラウンドA組

東北学院 16－9 山形大

山形大 21－12 福島大

東北学院 28－9 福島大

▽同B組

仙台大 17－13 弘前大

岩手大 15－6 弘前大

仙台大 15－7 岩手大

▽同C組

東北大 19－11 東北工大

宮城教大 20－12 秋田大

東北大 22－10 秋田大

宮城教大 13－10 東北工大

秋田大 12－10 東北工大

東北大 20－13 宮城教大

▽7〜10位決定リーグ

弘前大 25－12 福島大

福島大 10－9 秋田大

弘前大 9－8 東北工大

弘前大 12－6 秋田大

福島大 21－17 東北工大

秋田大×東北工大は予選ラウンドの記録を適用

【順位】⑦弘前大⑧福島大⑨秋田大⑩東北工大

▽4〜6位決定リーグ

岩手大 23（12－0、11－4）4 山形大

宮城教大 16（7－4、9－7）11 岩手大

宮城教大 14（6－9、8－2）11 山形大

【順位】④宮城教大⑤岩手大⑥山形大

▽決勝（1〜3位決定）リーグ

東北学院 18（9－2、9－6）8 仙台大

仙台大 15（7－7、8－6）13 東北大

東北学院 15（7－3、8－5）8 東北大

【順位】①東北学院②仙台大＝以上全日本学生選手権東北学連代表③東北大

北信越で金沢大が春秋優勝

北信越学生秋季リーグ戦は9月13、14日の両日、富山大学体育館に、5校が参加して行われた。

信州大(長野)が試験のため不参加となって、日程が縮まり、そのせいか、各校ともスタミナ充分の激突で盛りあがったが、結局、金沢大がエース佐野を東西対抗（名古屋）に送りこみながら、その穴を埋め春季につづき全勝した。3度目の優勝、秋季は45年以来5年ぶり、春秋制覇は初めて。

金沢大 27（15－9、12－1）10 金沢美術工芸大

金沢工大 14（8－3、6－2）5 富山大

福井大 12（8－4、4－7）11 金沢美術工芸大

金沢大 21（13－7、8－5）12 富山大

金沢工大 7（5－4、2－3）7 福井大 引き分け

金沢大 16（8－8、8－4）12 金沢工大

富山大 22（8－1、14－4）5 金沢美術工芸大

金沢大 18（13－5、5－5）10 福井大

金沢工大 28（16－1、12－2）3 金沢美術工芸大

富山大 12（6－4、6－6）10 福井大

【順位】①金沢大4戦全勝②金沢工大2勝1分1敗③富山大2勝2敗④福井大1勝1分2敗⑤金沢美術工芸大4敗

○……優勝有力とみられた金沢大、金沢工大はともに緒戦を飾り順調なスタートを切ったが、金沢大がつづく富山大戦も確実にものにしたのに対し、金沢工大は福井大にてこずって引き分けた。

第2日の第1試合で金沢大×金沢工大が顔合わせ〝決勝〟とあって熱のこもった試合になったが、金沢大は前半の4点差を守り切り金沢工大の猛迫をかわした。

このあと、金沢大は、健斗の福井大を降し、初の春秋優勝を決めた。金沢工大は、金沢美工大に勝ち、金沢大とともに全日本学生出場権を手にした。

（守屋義一・北信越学連委員長）

金沢大が好調 ▼北陸3大学体育大会ハンドボール競技（7月・富山大体育館）

金沢大 10（5－6、5－3）9 富山大

金沢大 20（9－7、11－8）15 福井大

福井大 24（12－9、12－6）15 富山大

【順位】①金沢大②福井大③富山大

京都教大が初優勝 近畿国立大

第13回近畿地区国立大学体育大会は8月下旬、京都を中心に行われたが、今大会からハンドボールの実施が決まり9大学が参加、トーナメントで優勝を争った結果関西学生2部春季で2位の京都教大が、同1位の京大を破って初優勝した。

▽1回戦

京都教大 27－9 大阪外語大

▽2回戦

滋賀大 26－15 京都工繊大

京大 22－13 大阪教大

京都教大 29－12 奈良教大

神戸大 14－12 神戸商船

▽準決勝

京都教大 13（7－5、6－4）9 滋賀大

京大 16（9－5、7－10）15 神戸大

▽3位決定戦

滋賀大 19（8－5、11－6）15 神戸大

▽決勝

京都教大 25（13－9、12－5）14 京大

関東学生10月日程

関東学生秋季リーグは9月24日駒沢屋内球技場で開幕したが、8校による男子1部10月の日程は次のとおり。

▽7日（15時30分、駒沢体育館）早×教、慶×明、中×芝、法×体

▽8日（15時30分、駒沢体育館）法×芝、早×明、慶×教、中×体

▽11日（14時15分、駒沢体育館）芝×明、体×教、中×慶、法×早

▽15日（15時30分、駒沢体育館）芝×教、体×明、法×慶、中×早

▽19日＝最終日（13時、駒沢屋内球技場）明×教、体×芝、早×慶、中×法

女子1部は今シーズンから5校2回総当り戦を採用、19日、男子と同時に終幕の予定。

世界へはばたけ日本のハンドボール

（協賛者御芳名・順不同）

株式会社 東口電機製作所
社長 東口武雄
奈良市二名町2603
TEL 0742—44—6161

中川石油株式会社
〒020 盛岡市菜園1丁目7番17号
電話（0196）23—(代)3241

医薬品並に健康関連総合商社
（株）小田島
本社 花巻市上町6—5 〒025 TEL01982-3-5162(代)
営業所 花巻，盛岡，水沢，一関，大船渡，釜石，宮古，久慈，青森，八戸，弘前，むつ，仙台，石巻，古川，気仙沼，秋田，大館，横手

うつくしく うつくしく よりうつくしく
Wacoal
ワコール

コロナとマークⅡの
岩手トヨペット
本社 盛岡市上田2丁目 TEL(51)3211（代）

株式会社 久保田鉄工
代表者 久保田広一
八尾市南本町四丁目九番一九号
TEL0729—23—0292

上田茂行

東海溶材株式会社
本社 清水市北脇242
支店 浜松市下石田町1743の1
営業所 小山，東京，相模原，三島，富士，三保，焼津，大井川，掛川，豊田，名古屋，四日市，大阪，富山，広島

株式会社 横山商店
横山豊
（第3回インターハイ準優勝清水商高主将）
清水市渋川468 TEL0543—45—3482

アサヒスポーツ
福井市松本3丁目4—2
TEL 0776—23—2555

広島県ハンドボール協会長
川上病院
広島市曙町2～33
TEL0822—61—3782

富士重工指定スバルサービス工場
（有）野田商会
野田勉
（第9回インターハイ優勝清水商高選手）
清水市万世町1丁目69 TEL0542—52—6750(代)

学生衣料製造卸
株式会社 島屋
高岡市問屋町41

北陸電力株式会社
福井支店
福井市日之出1丁目4番1号 〒910
電話（0776）㉒1212番（代表）

屋内外電気工事設計施工
火災報知機設備施工
伊藤電機設備株式会社
代表取締役 伊藤仁和
福井市順化2丁目2番1号 〒910
TEL 営業部(0776)22-7800(代) 工事部21-2266(代)

ヨーロッパの味
タキザワハム
取締役社長 滝沢武

AHF会議出席見合す

日本協会

日本協会・荒川清美理事長は9月22日、プレオリンピック（モントリオール）への出発を前に東京羽田空港で、10月18日クウェートで開かれる予定の「アジアハンドボール連盟（AHF）結成準備会議」に日本は代表を送らず、しばらく静観の態度を採ることを明らかにした。

◇

AHF結成については、クウェート、中国が中心となって、昨年9月以来、着々と準備が進められ日本協会などにも9条からなる「IHF規約案」が送付され、今年5月3日から5日まで、クウェートで、AHF正式発足のための会議が招集された。

ところが、これより先、IHF（国際ハンドボール連盟）は、独自の見解に立って、アジアを「極東」と「近東」に分け、アジアハンドボール界の組織化を企ろうとし、わざわざ今春1月、クウェートへIHF首脳が乗りこみ、クウェートらとも合意に達したとみられた。

にもかかわらず、AHF準備側は、5月に会議を企てたため、IHFも二分案が無視されたものとみて態度を硬化させ、4月17日付文書で「規約廃棄を勧告」＝本誌130号参照、さらにIHFアジア地域選出理事・渡辺和美氏は各国に対し「5月の会議に出席する必要はない」旨の文書を送りこんだ。

AHF準備側は、紛争をさけるためか、5月の会議を、10月18日に延ばしていた。

◇

日本協会は、全国代議員会・理事会でこの問題の全権を執行部にゆだねているため、6月以降の月例常務理事会で、毎回話しあいが行われていたが、結局、10月の会議を〝見送る〟ことになったものである。

荒川理事長は、この決定は、あくまで日本協会の判断によるもので「IHFの勧告や要請を全面的に受け入れたものでない」と強調しており、AHF結成そのものに関しては、特に反対する理由のないことを明言している。

しかし、IHFが、ともかくアジア二分案をかかげ収拾に乗り出そうとする動きも無視するわけにはいかず、すべてが落ち着いたあと、改めて日本協会の態度を決めても遅くないという〝判断〟が動いたことは否めない。

消息通は、10月18日の会議が予定どおり開かれれば、AHFの旗上げ（＝規約承認の意味）は必至とみており、その場合、IHFとの衝突を生むことになる。

荒川理事長は、モントリオール市で、M・リンケンバーガー事務総長らIHF首脳と「アジア問題」について話し合いたいといっており、新たな局面に向かうことも予想される。

なお、AHF結成に積極的な姿勢を示す中国のIHF観が、一連の問題を解く、一つの大きなカギとみられているが、リンケンバーガー事務総長が、日本協会へ寄せた文書（50年6月13日付）のなかで、「個人的に西ドイツに在る中国大使館とある期間、たえず接触をとり、中国ハンドボール協会にIHFへ加盟するよう提案していたが、彼らが明きらかに公式加盟したくないといっている以上、IHFの仕事ではなくなった」と述べており、注目を集めている。

これはIHF筋が、日本協会に示した中国に関する唯一の情報である。

顧問に平井富三郎氏

全日本実連理事会

全日本実連は9月20日名古屋で理事会を開き、新たに顧問として新日本製鉄社長・平井富三郎氏を迎えることに決定した。

同氏の顧問就任は、林達夫会長の橋渡しによるもの。

また、今春の役員改選以来、懸案となっていた渡辺和美副会長の顧問推せんも正式に決まった。

また、「日本リーグ」については、改めて、来年度からの実施を確認、早急に、準備委員の発表を日本協会に要望、11月中にメドをつけるよう作業を進めたい、とした。

トーナメントに推せん制

全日本実連は、今年度の全国実業団トーナメント(男子)を来年2月8日から11日まで京都府舞鶴市民体育館で32チームにより行うことを決めた。

参加チームは、今回から地域推せん制を採ることになり、中部6関東及び中四国各5、近畿4と振り分け、残る12チームは開催地2自衛隊推せん2、実連B登録8となった。

地域推せん制の採用は、ブロック実連の組織強化にもつながるものと期待される。

なお、このトーナメントの上位2チームと、日本実業団リーグの7、8位（日新製鋼呉、三菱レイヨン大竹）との入れ替え戦は、4者の総当り戦（期日、場所未定）になる模様。

◆**訂正**　本誌前号、全国高専選手権の記事で、前年優勝の宇部（山口）が不参加のように伝えましたが、その後、大会事務局から参加の連絡がありましたので訂正いたします。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

海外トピックス

杉山　茂
（NHK運動部）

ルーマニア女子勝つ
～カルパティア杯～

まず、女子のシーズン開幕を飾ったカルパティアマウンテンカップの結果からお伝えしよう。

参加したのは、2ケ月後にせまった世界選手権で優勝争いを演じるであろう5ケ国6チーム。

8月15日から20日までの6日間ブカレストなど3都市で熱戦をくりひろげ、予想どおり地元ルーマニア、東ドイツ、ハンガリーが、激しくせりあった。

ルーマニアは東ドイツを1点差でかわしたものの、ハンガリー戦は、終始先手をとりつづけられて苦戦となり辛くも引き分けにもちこみ、優勝へつなげることができた。ルーマニアとチェコは、世界選手権予選リーグで日本と同組。

東ドイツ 20（12－5，8－7）12 チェコ
ルーマニア 21（7－6，14－6）12 ルーマニアB
ハンガリー 17（7－6，10－4）10 ソ連
東ドイツ 22（11－5，11－6）11 ソ連
ルーマニア 17（7－7，10－7）14 チェコ
ハンガリー 26（17－5，9－2）7 ルーマニアB
ハンガリー 12（4－4，8－3）7 チェコ
ソ連 12（6－5，6－5）10 ルーマニアB
ルーマニア 15（8－7，7－7）14 東ドイツ
東ドイツ 22（11－4，11－9）13 ルーマニアB
チェコ 20（9－7，11－6）13 ソ連
ルーマニア 10（5－4，5－6）10 ハンガリー
引き分け
チェコ 24（11－9，13－8）12 ルーマニアB
東ドイツ 12（6－4，6－7）11 ハンガリー
ルーマニア 27（18－6，9－8）14 ソ連

【順位】①ルーマニア4勝1分②東ドイツ4勝1敗③ハンガリー3勝1分1敗④チェコ⑤ソ連⑥ルーマニアB

ハンガリー女子も強味
～バラトン・カップ～

また、この大会の直後、ヴェスズレム（ハンガリー）で、恒例の女子バラトンカップが行われ、ハンガリー×ルーマニアの決勝から、ハンガリーが後半、鮮やかなアタックで相手を突き放し優勝を飾った。

ルーマニアは予選でチェコと引き分けており、日本は両者にはさみ討ちされ世界選手権は苦しそう。

▽予選リーグA組
ハンガリー 14－10 ソ連
ソ連 12－7 デンマーク
ハンガリー 9－8 デンマーク

▽同B組
チェコ 20－11 ヴェスズレム
ルーマニア 30－7 ヴェスズレム
ルーマニア 16（分）16 チェコ

▽5位決定戦
デンマーク 12－10 ヴェスズレム

▽3位決定戦
ソ連 19（9－9，10－6）15 チェコ

▽決勝
ハンガリー 17（9－7，8－7）14 ルーマニア

ユーゴ、順当に優勝
～地中海競技大会～

4年に1度開かれる第7回地中海競技大会は8月21日から9月6日までアルジェリアで盛大に行われ、第5回（一九六七）から正式競技となったハンドボール（男子）は5ケ国が参加、予想どおりユーゴが圧倒的な強さを示して優勝を飾った。

ユーゴは、ポクラヤク、ミルヤク、クリボカピッチのトリオで64点をたたき出し、宿将ホルバットGKアルスラナジッチも健在を示した。

西ドイツ（クラブ）球界で活躍しているラザレビッチ、ラブルニッチは、完全にナショナルのメンバーからはずれたようである。

なお、この大会にはイスラエルも参加資格があり注目していたが姿を見せなかった。

スペイン 16（7－6，9－5）11 チュニジア
アルジェリア 18（5－7，8－6）13 イタリア
ユーゴ 34（21－9，13－5）14 イタリア
アルジェリア 20（8－8，12－8）16 チュニジア
チュニジア 22（12－7，10－5）12 イタリア
ユーゴ 25（15－14，10－5）19 スペイン
ユーゴ 33（14－10，19－12）22 チュニジア
スペイン 19（9－6，10－10）16 アルジェリア
スペイン 20（13－2，7－6）8 イタリア
ユーゴ 36（19－14，17－12）26 アルジェリア

【順位】①ユーゴ②スペイン③アルジェリア④チュニジア⑤イタリア

◇

西ドイツの「週刊ハンドボール」誌によれば、ユーゴ×アルジェリア戦の合計得点62は、第6回世界選手権（昭42）西ドイツ38－27日本

戦の合計65点に次ぐ公式国際試合の高点記録だとのこと。
日本の試合が、このような"世界記録"の片棒をかついでいるのを筆者は初めて知った。

チェコ、ルーマニア降す
～ベフレイグ杯～

チェコ国際"ベフレイグ・カップ"は、8月なかば東欧圏7ケ国8チームが参加、チェコ×ルーマニアの決勝から、大激戦の末、チェコが勝ち、地元ファンを熱狂させた。

▽予選リーグA組
ポーランド17―16 東ドイツ
ルーマニア18―15 チェコ若手
ルーマニア12―10 東ドイツ
ポーランド29―22 チェコ若手
東ドイツ15―13 チェコ若手
ルーマニア17（7―9、10―6）15 ポーランド

▽同B組
ソ　連24―19 ブルガリア
チェコ16―15 ハンガリー
チェコ23―22 ソ　連
ハンガリー32―20 ブルガリア
ハンガリー26―24 ソ　連
チェコ23―19 ブルガリア

▽7位決定戦
チェコ若手19―13 ブルガリア

▽5位決定戦
東ドイツ25（12―10、13―9）19 ソ　連

▽3位決定戦
ポーランド23（9―8、14―11）19 ハンガリー

▽決勝
チェコ19（9―9、10―9）18 ルーマニア

カップ・オブ・カップスの開設

今シーズンから本場ヨーロッパで、新しい国際トーナメントが始められる。サッカーなどがすでに試みている「カップ・オブ・カップス」である。
これまで行われていた「ヨーロッパ・カップ」も当然つづけられるから、これで、単独チームにとっては、二つのビッグトーナメントができたことになる。
この似たようなタイトルの大会は、ヨーロッパの国内大会の仕組みから説明しないと、よく理解できない。
てっとり早い例を出すならば日本にこれを当てはめると「ヨーロッパカップ」には全日本総合選手権の勝者――つまりナショナルチャンピオンが出場、「カップ・オブ・カップス」にはさしづめ日本実業団リーグの勝者あたりが出場すると思えばよい。
カップと云うのは、通常、選手権と考えられる。世界選手権をワールド・カップと別称する例である。
したがって、各国チャンピオンが、ヨーロッパ"選手権"をかけるから「ヨーロッパカップ」になるわけだ。
そうなると、「カップ・オブ・カップス」に出場するチームはなんなのサ、だ。
方法に多少の違いはあれ、各国とも、選手権とは別に、その国の協会杯(カップ)をかけた大会を必ずもっている。
この勝者が、新設のこの大会へ集まるわけだ。
今春来日したバロンマノ・グラノリエルス（スペイン）は、スペインリーグでは3位に終ったが、日本から戻ったあとのエスパニア（スペイン）カップでは見事に優勝している。
つまり同クラブは「ヨーロッパカップ」には出られないが「カップ・オブカップス」には晴れて姿を見せることができた。
ちなみに、今シーズンのヨーロッパカップ男子は、イスラエル代表のハポエル・レチョボトをはじめ22ケ国、カップ・オブ・カップス男子には、グラノリエルスら15ケ国が代表を送っている。面白いことに、カップ・オブ・カップスには、東欧勢が1ケ国も参加していない。ボイコットというと大げさだが、無視しているわけだろう。
国内でこのシステムを模倣するならば、全日本総合選手権の勝者がジャパンカップのウィナー。全日本実業団、教職員、学生など5加盟団体の勝者による大会1位がカップ・オブ・カップスの栄光だ。
最近話題にあがる全国クラブ選手権をクラブ・カップと名付けて各ブロッククラブ選手権の勝者を集める手もあるだろう。

5ケ国クラブ杯

ユーゴのパルチザンでこのほどユーゴ、ルーマニア、ハンガリー、チュニジア、イタリア5ケ国8クラブの選抜大会"チャンピオンカップ"が行われ、連日大観衆を動員、結局地元パルチザン・ブジェロバルが決勝でボラク・バンヤ・ルカ（ユーゴ）を32―26で破り優勝。

盛んな"補強"

注目の西ドイツリーグ（ブンデス・リガ）は間もなく開幕だが、日本のプロ野球まがいの引き抜きや異動が相変らず。
今季は特にアイスランド勢の迎え入れが目立ち、ダンケルセンにO・ヨンソン、ギョッピンゲンにG・アイナルソン、ハンブルグSVにE・マグヌソンが加った。
ラブルニッチ(ユーゴ)を去年入れたTUS・デルスクラグが待望のリーグ入りを果たしたのをみても、この傾向はいっそう強まりそうだ。

ヨーロッパ・カップ

男子第16回、女子第15回ヨーロッパカップトーナメントは、各国のチャンピオンチーム（先シーズン）が参加して10月3日開幕、来春4月まで各国で熱戦譜をつづる
今シーズンから別掲のように、新大会カップ・オブ・カップスが始められるため、伝統を誇るこの大会は、これまで以上に内容の充実が期待されていた。
ところが男子は、前回優勝のASK・V・フランクフルト（東ドイツ）が出場を辞退したほか、ルーマニア、ソ連、ハンガリー、東ドイツが代表を送りこまず、揃って強国だけに内容低下は否めずIHF（国際ハンドボール連盟）も苦々しい表情である。
今大会の参加は、前回2位のRK・ボラク・バンヤルカ(ユーゴ)過去5回優勝のグンメルスバッハ(西ドイツ)ら22ケ国。
また女子は、これまでに12ケ国のエントリーが確定しているが、男子同ようスパルタク・キエフ（ソ連、前回優勝）ら東欧の強豪の去就が決まっていない。

台南から視察

台湾の教師チーム・台南県手球隊16名が8月なかばに突然来日、大学の夏季合宿を見学した。

福島勢の躍進目立つ　東北国体

第2回東北総合体育大会（東北ミニ国体）は9月13日から16日までの4日間、秋田県下で29競技がいっせいに熱戦をくりひろげた。

ハンドボールは湯沢市で東北6県の代表（成年女子のみ山形欠場）が5部門に参加、好試合を演じた。

その結果、注目の少年は男女とも地元・秋田が優勝を飾り、教員は福島が岩手の5連勝を阻み、11年ぶり3度目の制覇を遂げた、

第28回東北選手権を兼ねた成年は男子が福島SGク、女子が東北ムネカタと福島勢の完勝、ムネカタは4連勝となった。

また県別得点争いは、福島県が快勝した。

▽成年・一般男子予選ラウンド

仙台育英OB（宮城）15―12 盛岡商友会（岩手）

福島SGク（福島）22（延）21 青森ク（青森）

下北手ク（秋田）17―15 山形ク（山形）

（注）勝者は決勝リーグ、敗者は4～6位決定リーグ

▽同4～6位決定リーグ

青森ク 16（9―5　7―7）12 山形ク

盛岡商友会 20（7―4　13―3）7 山形ク

青森ク 13（6―6　7―6）12 盛岡商友会

【順位】④青森ク⑤盛岡商友会⑥山形ク

▽同決勝リーグ

仙台育英OB 21（15―6　6―6）12 下北手ク

福島SG 21（11―5　10―3）8 下北手ク

福島SG 17（7―3　10―3）6 仙台育英OB

【順位】①福島SGク②仙台育英OB③下北手ク

▽同・教員1回戦（2試合）

宮城教員 15（14―6　21―7）13 青森教員

秋田教員 22（10―7　12―6）13 山形教員

▽同準決勝

岩手教員 24（9―7　15―9）16 宮城教員

福島教員 30（15―9　15―3）12 秋田教員

▽同決勝

福島教員 21（11―9　10―8）17 岩手教員

▽成年女子1回戦（1試合）

仙台ク（宮城）9（5―2　4―7）7 あすなろク（青森）

▽同準決勝

東北ムネカタ（福島）22（10―10　12―3）13 仙台ク

全和洋（秋田）8（7―0　1―5）5 花巻ク（岩手）

総評　森恭一

各部門とも三重国体へ直結するとあって熱戦つづき。特に代表権が2となった少年男子は、リーグ形式を採用したこともあり、好試合が多かった。

優勝チームは、いずれも順当なところへ落ち着いたが、近年になく、各県の実力が接近したのが目立ち、この大会に対する意気ごみを感じとれた。

また、少年男女で、ようやくピックアップピチームの抬頭が目立つようになり、〝単独優勢〟の傾向が崩れる兆をのぞかせた。

国体予選を兼ねての運行は、こうした新しい流れをよんでいるが反面、成年女子は今年から学生の参加が認められなくなったため、著しくレベルが落ちこみ、みるべきものがなく、旧来の規程復活（学生の2名参加）を望む声が圧倒的で、「学連登録者を除き一チーム6名程度の学生参加を認めてはどうか」という意見さえあった。

女子の進学率急上昇を考えれば「学生」という線ですべてを締め出すのは問題だろう。

日本協会サイドで〝改良〟が検討されることを希望したい。

競技面では、福島の躍進が目立ち、教員が常勝・岩手を制したのをはじめ、各部門とも決勝に勝ちあがる奮斗だった。

総合得点争いは、少年で完勝した秋田と激しいせりあいとなり、優勝数3―2がそのままモノをいって福島に栄冠が輝やいた。

このほか、2年後に国体を控えた青森の堅実な成長が注目され、逆にかつては3部門優勝を飾ったこともある岩手が衰退、東北球界も、ミニ国体開設を一つの刺激として、その勢力分布を変えつつある印象をうけた。

（日本協会理事、大会委員長）

▽同決勝

東北ムネカタ 17（4―3　3―8）11 全和洋

▽少年男子予選リーグA組

全秋田 11―5 全岩手

福島選抜 12―5 全岩手

全秋田 11―10 福島選抜

▽同B組

仙台育英高（宮城）13―8 全山形

全山形 12―11 青森選抜

仙台育英高 16―11 青森選抜

▽同決勝リーグ

福島選抜 16（9―4　7―3）7 全山形

全秋田 10（3―4　7―2）6 仙台台英高

全秋田 20（10―4　10―5）9 全山形

仙台育英高 13（10―4　3―7）11 福島選抜

全秋田×福島選抜、仙台育英高×全山形の試合は予選リーグの記録を適用

【順位】①全秋田3戦全勝②仙台育英高2勝1敗③福島選抜④全山形

▽同女子1回戦（2試合）

青森選抜 11（4―2　3―5：0―1　1―0：1―0　2―1）10 花巻南高（岩手）

福島選抜 12（6―1　6―4）5 築沢女高（山形）

▽同準決勝

和洋女高（秋田）11（6―0　5―1）1 青森選抜

涌谷高（宮城）3（2―1　0―2）2 福島選抜

▽同決勝

和洋女高 7（5―2　2―4）6 涌谷高

【県別総合得点】①福島30②秋田24・5③宮城20・5④岩手14・5⑤青森12・5⑥山形7

▽成年男子・三重国体東北第4代表決定戦

岩手（盛岡商友会）29―12 秋田（下北手ク）

各地の記録

実業団の勝者（大同製鋼・田村紡）敗れる

第27回東海選手権は8月30、9月1日の2日間、三重・四日市高球技場に各県の代表を集め、男子はトーナメント、女子はリーグ戦で争われたが、男女とも日本実業団リーグのペナントウィナーが敗れる波乱となり、コートサイドをわかせた。

男子は、本田技研鈴鹿（三重）が迫力のある攻撃で、大同製鋼（愛知）を押しこみ、終盤、追いこまれたものの巧みに逃げきって2年連続4度目の優勝。

女子は、2勝同士のブラザー工業（愛知）×田村紡（三重）の首位争いとなり、田村が前半のリードを活かし切れず、ブラザーの波にのった攻撃にゴールを割られて逆転負け、ブラザーは3年ぶり2度目の優勝を遂げた。

▽男子1回戦（＝準決勝）
本田技研鈴鹿（三重） 33（18―5、15―5）10 二和家具（岐阜）
大同製鋼（愛知） 28（13―3、15―6）9 静農ク（静岡）
▽同3位決定戦
静農ク 17（7―8、10―8）16 二和家具
▽同決勝
本田技研鈴鹿 13（7―5、6―7）12 大同製鋼
▽女子リーグ
田村紡（三重） 39（21―0、18―0）0 岐阜一般
ブラザー工業（愛知） 22（13―1、9―1）2 浜南ク（静岡）
ブラザー工業 36（17―0、19―2）2 岐阜一般
田村紡 30（13―1、17―2）3 浜南ク
浜南ク 13（4―3、9―1）4 岐阜一般
ブラザー工業 9（2―3、7―5）8 田村紡
【順位】①ブラザー工業②田村紡③浜南ク④岐阜一般

ビクター、重機に辛勝

第22回関東選手権は8月23、24日、茨城県笠間市民体育館を主会場にして、男子8、女子7チームが参加、トーナメントで争われた。

男子は、三景（東京）×大崎電気（埼玉）が準決勝で顔を合せ、三景が押し勝ち、決勝でも粘る全神奈川を振り切って2年連続3度目の優勝を飾った。

女子は日本実業団リーグ加盟の4チームが登場、興味をもたせたが、予想どおり日本ビクター（茨城）×東京重機（東京）の決勝、ビクターが重機の激しい追いあげをかわして4年ぶり2度目の栄冠を手にした。

▽男子1回戦
全神奈川 18（8―9、11―5）14 富岡ク（群馬）
海上自衛隊下総（千葉） 24（10―3、14―9）12 甲府ク（山梨）
三景（東京） 30（14―8、16―9）17 AOK栃木（栃木）
大崎電気（埼玉） 27（13―4、14―8）12 自衛隊勝田（茨城）
▽同準決勝
全神奈川 25（12―7、13―3）10 海上自衛隊下総
三景 20（8―7、12―4）11 大崎電気
▽同決勝
三景 24（11―9、13―10）19 全神奈川
▽女子1回戦（3試合）
日立栃木（栃木） 11（5―4、6―4）8 大崎電気（埼玉）
全神奈川ク（神奈川） 12（7―5、5―5）10 水郷ク（千葉）
東京重機（東京） 36（20―1、16―1）2 前橋ピジョンズ（群馬）
▽同準決勝
日本ビクター（茨城） 17（7―1、10―2）3 日立栃木
東京重機 26（16―3、10―3）6 全神奈川ク
▽同決勝
日本ビクター 13（7―7、6―4）11 東京重機

函館有斗クの堅城崩れず

第5回北海道クラブ選手権は、8月6、7の両日函館市民体育館に、男子9、女子2チームが参加して行われ、男子は今年も函館有斗クの堅城は崩れず、第1回以来5連勝を飾った。

女子は室蘭OGクが2年ぶり4度目の優勝。

▽男子1回戦（1試合）
登別ク 23―17 函館翔球会
▽同2回戦
第7師団ク 25―15 志峰ク
函館有斗ク 29―21 室蘭東ク
函館大谷ク 46―13 登別ク
函工OB 19―14 登別大谷ク
▽同準決勝
函館有斗ク 33（15―3、18―7）10 第7師団ク
函館大谷ク 25（13―2、12―9）11 函工OB
▽同決勝
函館有斗ク 26（14―5、12―9）14 函館大谷ク
▽女子決勝
室蘭東OGク 23（8―2、15―4）6 函商OG

2部で山王ク勝つ

▼第27回岩手県民体育大会ハンドボール競技（8月・岩手大）
▽成年男子1部準決勝
盛岡商友会 23―10 白亜ク
岩手教員ク 24―15 岩手大
▽同決勝
岩手教員ク 20（12―7、8―7）14 盛岡商友会
▽同2部1回戦（2試合）
盛岡市役所 22―9 志高ク
花巻ク 14（延）12 岩手日報
▽同準決勝
岩手トヨペット 11―8 盛岡市役所
山王ク 9―8 花巻ク
▽同決勝
山王ク 13（5―5、8―4）9 岩手トヨペット
▽少年男子準々決勝
花巻北高 19―13 水沢高
盛岡商高 24―5 生活学園
盛岡四高 15―13 盛岡三高
盛岡一高 21―11 福岡高
▽同準決勝
盛岡一高 14―5 盛岡四高
花巻北高 11―7 盛岡商高
▽同決勝
花巻北高 16（10―4、6―5）9 盛岡一高
▽同女子準々決勝
盛岡二高 6―2 花巻北高
岩手女高 15―4 釜石南高
大原商高 7―2 水沢高
花巻南高 11―1 花巻農高
▽同準決勝
岩手女高 7―3 盛岡二高
花巻南高 9―5 大原商高
▽同決勝
花巻南高 8（4―0、4―4）4 岩手女高

住化菊本、丸善石油かわす

▼第2回愛媛スポーツ大会（8月 松山北高）
▽成年男子準決勝
住友化学菊本 21―14 松山ク
丸善石油松山 20―7 新居浜ク
▽同決勝

住友化学菊本 17（7―5 10―5）10 丸善石油松山
▽少年男子決勝リーグ
宇和島南高 12―8 新居浜工高
新居浜工高 12―6 中予選抜
宇和島南 10（分）10 中予選抜
▽同女子決勝リーグ
新居浜商高 14―4 中予選抜
新居浜商高 26―4 大島高
中予選抜 12―2 大島高

和洋女高、圧倒の強さ

▼第26回秋田県民体育大会ハンドボール競技（8月・大曲仙北圏民体育館）

▽一般男子1回戦（＝2試合）
下北手ク 15―9 大農ク
千畑ク 14―13 緑ケ丘ク
▽同準決勝
大曲OB 10―6 千畑ク
下北手ク 15―11 湯沢ク
▽同決勝
下北手ク 8（3―3 5―3）6 大曲OB
▽高校男子1回戦（＝3試合）
大東 15―4 羽後
湯沢 12―5 大曲農
大曲 19―3 秋田南
▽同準決勝
金秋田 25―5 大東
大曲 13―11 湯沢
▽同決勝
金秋田 14（7―0 7―3）3 大曲
▽同女子準決勝（＝1回戦）
和洋女 12―0 六郷
大曲 10―6 大曲農
▽同決勝
和洋女 11（3―0 8―0）0 大曲

国学院高、AOKを破る

▼第23回栃木県総合選手権（9月栃木女高）

▽男子準々決勝
AOK栃木Ⅱ 棄権 烏山町
国学院栃木高 21―13 柿の実ク
AOK栃木 28―5 馬頭高
栃木教員 24―17 ブリヂストン
▽同準決勝
国学院栃木高 棄権 AOK栃木Ⅱ
AOK栃木 20―14 栃木教員
▽同決勝
国学院栃木高 15（4―5 8―7 …… 3―1 0―0）13 AOK栃木
▽女子3回戦（2試合）
栃木女高 10―6 小山城南高
栃木女高B 14―8 小山城南高B
▽同準決勝
日立栃木 18―6 栃木女高
日立栃木B 17―3 栃木女高B
▽同決勝
日立栃木 10（4―3 6―2）5 日立栃木B

倉敷商、津山工振り切る

▼第30回岡山県高校選手権（9月倉敷商）

▽男子準々決勝
津山工 12―6 邑久
金川 12―7 高梁工
倉敷商 9（分）9 児島
PTコンテストで倉敷商の勝ち
倉敷工 17―8 天城
▽同準決勝
倉敷商 10―3 倉敷工
津山工 20―16 金川
▽同決勝
倉敷商 13（8―3 5―9）12 津山工
▽女子準々決勝
真備 13―1 岡山女
津山 15―4 倉敷南
操山 18―5 倉敷中央
金川 14―2 西大寺
▽同準決勝
真備 15―2 津山
金川 16―3 操山
▽同決勝
真備 10（6―0 4―1）1 金川

ブラザー工業順当勝ち

▼愛知女子実業団リーグ（9月名古屋市体育館）

豊田工機 13―7 伏原紡織
ブラザー工業 30―5 伏原紡織
ブラザー工業 21―3 豊田工機
ブラザー工業 30―4 伏原紡織
ブラザー工業 19―3 豊田工機
豊田工機 14―6 伏原紡織
【順位】①ブラザー工業4戦全勝②豊田工機2勝2敗③伏原紡織4敗

▽おことわり 「IHF審判講習会報告②」は、誌面の都合で次号に掲載します。

三重国体県予選②（報告分のみ）

◇宮城
▽成年男子準決勝
東北学院大OB 25―15 マツダオート宮城
育英高OB 19―12 古川工OB
▽同決勝
育英高OB 16―13 東北学院大OB
▽少年男子準決勝
古川工高 12―3 仙台三高
仙台育英高 21―6 古川商高
▽同決勝
仙台育英高 16―10 古川工高
▽同女子準決勝
飯野川高 8―2 仙台女商高
涌谷高 14―1 塩釜女高
▽同決勝
涌谷高 13―2 飯野川高

関東学生、波乱の幕あけ

【速報】秋の関東学生リーグが9月24日駒沢屋内球技場で始まり、注目の男子1部は、春季2位の法政が明治に12―19、同4位の慶応が日体に15―17で敗れる波乱の幕あけとなった。

連勝を狙う中央は久々に復帰した東京教大を破り、早稲田も芝浦工大に順当勝ち。

女子1部（回戦制）は日体が東京教大に辛勝、東京学芸大は日女体大を押し切った。

編集後記

□……全日本男子がモントリオールへ出発して、本番を狙う強化体制がいよいよ本格化しました。プレオリンピックの結果は本誌がお手元に届く頃には判明しているハズですが、このあたりが、月刊誌のもつもどかしさ。三重国体組み合わせも、〆切日後に決定とあって、収容できませんでした。

□……少々、発行がズレても、速報を建前にしたら、ともいわれますが、そうなると印刷―発送にも波及して、かなり遅くなるわけで、特別の時以外は発行日（毎月1日）厳守です。

寄稿される皆さんも、〆切りのメドを毎月15日に置いていただけるとよいのですが。

□……日本協会事務局の森岡美子さんが退任されました。

ここ数年、日本協会の運営が極めてモダンで、スムースに展開されたのは、荒川体制の手腕のほかに事務局の堤、森岡両氏の活躍によるところ大でした。

特に、森岡嬢の行き届いたマネージメントは、中央に対する地方の信用を〝回復〟させる原動力でした。今春、健康をそこねての退会。これまでのご努力に心から感謝するとともに一日も早い全快をお祈りします。（S）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』 第一三五号
昭和四十年六月十 第三種郵便物認可
昭和五〇年九月二十五日印刷 昭和五〇年十月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会 渋谷区神南一-一-一 大代表(467)三一一一 振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 荒川清美
定価二百五十円（年間購読料二千五百円）